

# 博 多 129

—博多遺跡群第171次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1041集

2009

福岡市教育委員会

## 序

玄界灘に面し古くから大陸との文化交流の玄関口であった福岡市には、豊かな自然と文化が残されています。その中でも博多区は大陸との交流で古くから栄え、遺跡も多く存在しています。これらを保護し、未来へと伝えていくのは本市に課せられた責務であります。しかし、近年の著しい都市化による市街地の拡大により、その一部が急速に失われつつあることもまた事実です。福岡市教育委員会は開発によってやむを得ず失われていく遺跡について、事前の発掘調査を行い、記録の保存に努めています。

今回報告する博多遺跡群の発掘調査報告書は立体駐車場建築に伴う調査成果についての記録です。この調査では古代末から近世の集落を確認しました。本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料として御活用頂ければ幸いに存じます。最後に発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対して心から謝意を表する次第であります。

2009年3月31日

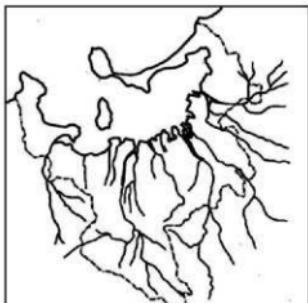
福岡市教育委員会

教育長 山田裕嗣

## 例 言

- 本報告書は博多区祇園町566、585-1の立体駐車場建設に伴って2007年2月19日から6月15日にかけて発掘調査を行った博多遺跡群第171次調査の報告書である。
- 本書に収録した発掘調査は福岡市教育委員会の屋山洋が担当した。
- 遺構実測は大塚正樹と屋山が、遺構・遺物の写真撮影は屋山が、遺物実測は濱石正子、平川敬治、名取さつきが、製図は熊谷幸重、濱石正子が担当した。
- 銅錢の分類等は福岡市埋蔵文化財センターの片多雅樹が担当した。
- 本書で用いた方位は磁北である。
- 本書に関わる図面・写真・遺物など一切の資料は福岡市立埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。
- 貿易陶磁の分類は大宰府条坊跡XV-陶磁器分類編-(2000年)太宰府市教育委員会を参照した。

遺跡調査番号	0670	遺跡番号	020127	分布地図番号	天神49
調査地地番	福岡市博多区祇園町566、585-1				
開発面積	1025m <sup>2</sup>	調査面積	511m <sup>2</sup>	調査原因	立体駐車場建設
調査期間	20070219~20070615		担当者		屋山 洋



遺跡略号 HK T-171

調査番号 0670

## 本文目次

I はじめに .....	1
II 調査の記録 .....	3
1 調査の概要 .....	3
2 遺構と遺物 .....	3
3 小結 .....	27
表1 出土墨書き器一覧 .....	26
表2 出土銅錢一覧 .....	26
表3 遺構一覧表 .....	28

## 挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図 (1/25,000) .....	2
第2図 調査地点位置図 (1/8,000) .....	2
第3図 調査区周辺図 (1/500) .....	3
第4図 調査区範囲図 (1/400) .....	5
第5図 第1・2面全体図 .....	折り込み
第6図 第3・4面全体図 .....	折り込み
第7図 第5面全体図 .....	折り込み
第8図 土層実測図 .....	折り込み
第9図 SC 151 遺構・遺物実測図 (1/40・1/3) .....	7
第10図 溝 遺構・遺物実測図 (1/40・1/3) .....	8
第11図 井戸遺構・遺物実測図 (1/30・1/3) .....	9
第12図 SE 280 井筒実測図 (1/8) .....	10
第13図 SE 168 遺構・遺物実測図 (1/60・1/30・1/3) .....	11
第14図 SE 168 遺物実測図 (1/3・1/8) .....	12
第15図 土坑実測図 1 (1/40) .....	13
第16図 土坑実測図 2 (1/40) .....	14
第17図 土坑実測図 3 (1/40・1/6) .....	15
第18図 土坑出土遺物実測図 (1/3) .....	16
第19図 SK 274・276 人骨出土状況実測図 (1/10) .....	17
第20図 人骨横トレンチ出土遺物実測図 (1/3) .....	17
第21図 SX 154 遺構・遺物実測図 (1/60・1/3) .....	18

第22図	SX 204 出土遺物実測図 (1/3) .....	19
第23図	水田 (烟) 出土遺物実測図 (1/3) .....	20
第24図	河川出土遺物実測図 (1/3) .....	21
第25図	出土瓦実測図 (1/3) .....	22
第26図	その他の出土遺物実測図 (1/3・1/1) .....	23
第27図	円筒埴輪実測図 1 (1/3) .....	24
第28図	円筒埴輪実測図 2 (1/3) .....	25
第29図	墨書き土器 .....	26
第30図	出土錢の透過X線画像 .....	26
第31図	金属製品実測図 (1/2・1/1) .....	26

## 図 版 目 次

図版1	1. I区1面 2. I区3面 .....	34
図版2	1. I区5面 2. II区3面 .....	35
図版3	1. II区5面 2. 第5面調査区全景 .....	36
図版4	1. I区1面 2. I区2面 3. I区3面 4. I区4面 5. II区3面 6. II区3面北端 .....	37
図版5	1. SE041 井筒検出状況 2. SE041 完掘 3. SE158 土層 4. SE260 5. SE 272 6. SE 275 .....	38
図版6	1. SE168 2. SE168 3. SE168 井筒 4. SE168 井筒土層 5. SE280 6. SE280 井筒 .....	39
図版7	1. SK153 遺物出土状況 2. SK212 土層 3. SK259 4. SK144 5. SK 187 完掘 6. SK 146 .....	40
図版8	1. SX 274 2. SK 276 3. SX 204 4. SX 204 土層 5. SD 154 6. SD 154 .....	41
図版9	1. SD 154 北端か 2. 房州堀土層 3. 房州堀土層 4. 房州堀北側立ち上がり 5. 人物埴輪正面 6. 人物埴輪側面 .....	42
図版10	1. SX 271 2. SX 271 周溝杭出土状況 3. 水田下層動物足痕 4. SC 151 5. SC 151 6. SC 151 飯蛸塗出土状況 .....	43
図版11	1. I区河川トレンチ土層 2. II区東壁土層 3. II区河川部確認トレンチ土層 4. SK 217 漆抜出土状況 5. SK 217 出土漆椀 6. SE168 井筒 .....	44

## I. はじめに

### 1. 調査にいたる経過

平成 18 年（2006 年）6 月 26 日付で百田興産株式会社代表取締役百田孝志氏から福岡市教育委員会埋蔵文化財第1課に自走式立体駐車の建設に伴う埋蔵文化財事前審査申請書（18-2-308）が提出された。申請地は周知の埋蔵文化財である博多遺跡群の縁部に位置しており、隣接地の発掘調査でも古墳時代から近世を中心とした集落等の遺構が確認されており、申請地においても平成 16 年 12 月の確認調査（事前審査申請書 16-2-808・832 に基づく）では敷地の北東側で遺構と遺物を確認していた。このときの調査結果によると敷地東側では現地表面からの深さ 60cm で砂丘面に達し、古墳時代から近世にかけての遺構を確認している。その結果と建設予定建物の基礎設計を照らし合わせたところ、計画されている建物基礎では遺跡の破壊が避けられないため、建設に先立ち埋蔵文化財の発掘調査を行い記録保存を図ることで両者の合意が成立した。以上の協議をうけて平成 19 年（2007 年）2 月 19 日から 6 月 15 日の期間で発掘調査を行った。調査期間中は調査事務所、水道、廃土搬出など原因者及び関係者各位の多大なご協力を得た。

### 2. 調査の組織

調査主体 教育委員会文化財部埋蔵文化財第1課

埋蔵文化財第1課課長 山口頼治

調査係長 米倉秀紀

調査庶務 （前）鈴木由喜 （現）古賀とも子（文化財整備課）

調査担当 屋山 洋

作業員 石田和子 乾 俊夫 岩田淳二 岩本三重子 大塚正樹 関部安正 片岡武俊 河原明子  
桑原美津子 小路丸嘉人 武田潤子 堀 正子 豊田忠一 中島道夫 永田律子

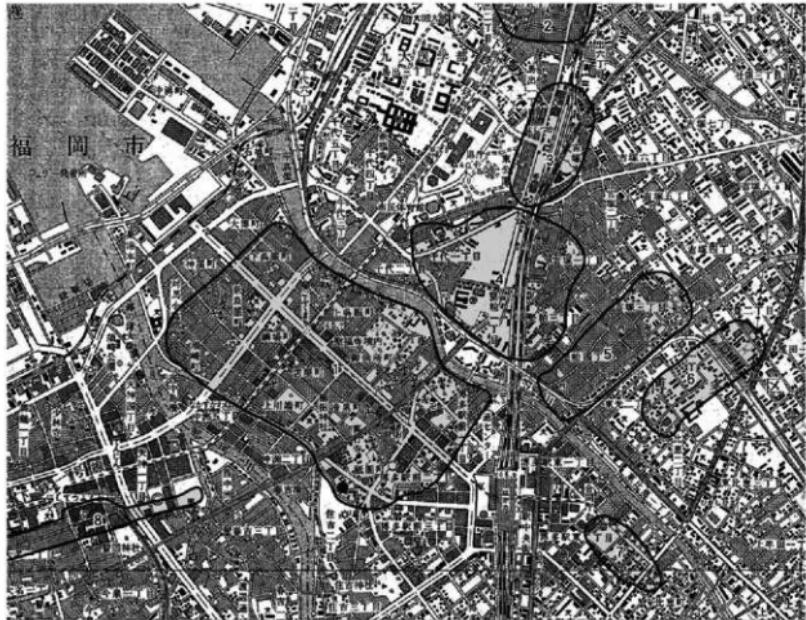
中村健三 夏秋弘子 西田由喜 吹春憲治 本郷満子 前田佳代 村田敬子 安元尚子

水野由美子 西 美由喜

整理作業 大石加代子 熊谷幸重 藤野洋子 村上恵子

### 3. 立地と環境

博多遺跡群は現在の地下鉄祇園駅から上呉服町までの砂丘Ⅰ・Ⅱと奈良屋町を中心とする砂丘Ⅲに分かれるが、砂丘Ⅲを当時の呼び方から沖ノ浜、砂丘Ⅰ・Ⅱを便宜的に博多浜と呼んでいる。もっとも古い遺構は博多浜で弥生時代中期窯棺などが確認されている。古墳時代になると博多浜東南隅に前方後円墳や方墳が築かれる。古代には地下鉄祇園駅の西側に方1町の官衙施設が作られ、周辺では石帶など役所関係の遺物が多く出土する。その後鴻臚館が廃絶すると、この施設を中心に中国人商人たちが住み始め、博多の発展の基礎を築いたとされる。その後博多は大陸、琉球との貿易拠点として栄えたが、江戸時代になり海外との交易が制限されると黒田藩の一貿易都市としての役割にとどまるようになつた。本調査区は博多遺跡群の南西隅に位置する。元々は御笠川と那珂川の合流地点で、天然の堀で囲まれていたが、戦国時代に御笠川の流れを博多の東側に付け替え（現石堂川）、御笠川旧河川は房州堀と呼ばれ、博多の南側を守る堀となつた。しかし、江戸時代になるとその意義を失い、近世中頃の絵図には堀の中に水田が描かれている。また堀は明治時代に埋められてその役割を完全に終えたが、今回近代の埋立て土を除去したところ、堀の下層で水田と思われる方形に巡る溝と、土留めの木杭列を確認することができた



第1図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

1. 博多遺跡群 2. 箱崎遺跡 3. 吉塙本町遺跡 4. 穀船遺跡  
5. 吉塙遺跡 6. 豊造跡 7. 駅東生産遺跡 8. 福岡城跡



第2図 調査地点位置図 (1/8,000)

は博多遺跡群の範囲 (2009年3月現在)



第3図 調査区周辺図 (1/500)

## II. 調査の記録

### 1. 調査の概要

敷地全体が建物の建設予定範囲であるが、平成16年度の確認調査によると敷地の南西側は河川堆積になっており（本調査地点と西側のキャナルシティの間の道は旧河川で、今度の調査時にも道路境界に沿って護岸と思われるコンクリート壁を確認した。）、西南隅部では遺構が確認できることから敷地の南西部を調査の対象地から外し、北東壁に沿った511m<sup>2</sup>を調査対象とした。

砂丘は調査区東端部では現表土直下（標高3m）で出土するものの、西側に向かって急激に落ちており、西端部では表土からの深さ2,4m（標高0.9m）を測り、高低差は2,1mにもなる。西側斜面上には黒褐色包含層が堆積しているが、この堆積は河川による浸食が終わった中世後半から近世以降である。近代初頭にはまだ高低差が見られたが、その後炭化物や近代陶器などを多く含む層で一気に埋められ、平坦面を為す。近代埋立て層の土量が多く、廃土置き場に置ききれないとから、最初に重機をいれて、近代埋立て土を場外搬出することとなった。調査はまず2月15日から19日まで近現代堆積土の表土剥ぎから始まった。その後、調査を開始したが、博多遺跡群としては調査面積が広く一度に全体の調査をするのは困難だったため、南北に分けて北側をI区、南側をII区とした。I区は前述したように東側が高く、西側に向かって低くなる。II区は北東端がわずかに高いだけで南側と西側に向かって傾斜するが、これは砂丘南側に位置する東西方向の堤（房州堤）と砂丘の西側を流れる河川に向かって傾斜するためで、本調査地点は博多遺跡群の南西端に位置するものである。

### 2. 遺構と遺物

#### 1) 積穴式住居 調査区中央部の砂丘上で1軒検出した。

**SC 151 (第9図)** 調査区中央部の砂丘上面西端に位置する。御笠川に砂丘西側が削られたため、本遺構も西側半分が削平されている。南北5m、東西2m、深さ30cmを測る。覆土中から古墳時代前期の土器と婧壺がまとめて出土した。出土遺物(001～009)。001は二重口縁壺である。淡黄褐色を呈す。002は鉢である。胴部は綫方向、肩部は横方向に密なミガキで、口縁はハケ後横方向に密なミガキを施し、その後粗い綫方向のミガキを施す。003は長頸壺である。内外面とも綫方向のミガキを施す。004は復元口径10cm、残存高5cmを測る。器壁は1.6cmと厚い。外面は綫ヘラナデ後横ナデ、内面はナデを施す。色調は赤褐色から黒褐色で被熱している。胎土は白色砂を多く含む。埴輪の可能性がある。005～009は婧壺である。黄褐色を呈し、焼成は良好である。

## 2) 溝 6条出土した。

**SD 036 (第10図)** 調査区北側に位置し主軸をN-64°-Wにとる。長さ330cm、幅40cm、深さ24cmを測る。北西端から90cmで段を持ち、中央部が最も深い。覆土中から青磁碗、白磁碗、染付、陶器甕や土師壺・皿(糸切り)の他に古墳時代の土師器が多く出土した。中世後半か。出土遺物(010～012)。010、011は染付の碗小片である。012は青磁輪花碗である。

**SD 047 (第10図)** I区1面の中央に位置する東西方向の溝で主軸をN-73°-Eにとる。東側を攪乱に切られており、現状で長さ90cm、幅47cm、深さ17cmを測る。遺物は小片が多く染付、陶器、土師壺・皿(糸切り)の他に8世紀の須恵器高台付壺や古墳時代の土師甕が出土した。中世後半か。

**SD 077 (第10図)** I区1面の北端に位置し主軸をN-49°-Eにとる。北東端をSP 078と攪乱に切られており、現状で長さ170cm、幅52cm、深さ24cmを測る。底面は幅狭く、断面逆三角形を呈す。土師壺(ヘラ切り)、土師皿(糸切り)の他に古墳時代土師甕等が出土した。12～13世紀か。

**SD 079 (第10図)** SD 077に並走する。現状で長さ160cm、幅51cm、深さ24cmを測る。白磁小片、陶器片、土師皿(糸切り)等が出土した。時期は判りづらいがSD 077と並走することから12～13世紀か。

**SD 148 (第10図)** I区2面中央に位置し西側をSE 168に切られる。主軸をN-77°-Eにとる。現状で長さ115cm、幅70～80cm、深さ45cmを測る。北側にテラスが付く。染付小窓、陶器片、瓦質片口福鉢、土師壺・皿(糸切り)などが出土した。中世後半から近世か。

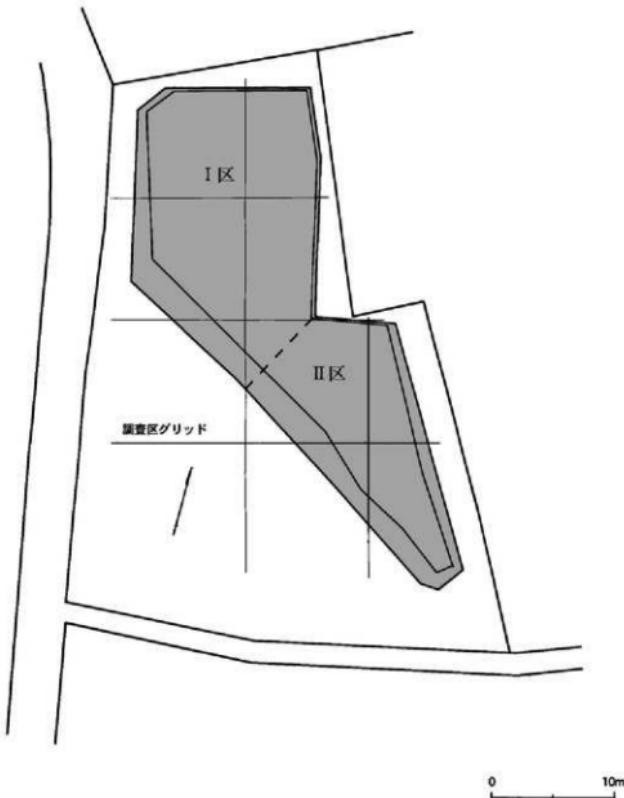
**SD 200 (第10図)** 調査区のII区2面中央に位置し主軸をN-85°-Eにとる。西側を攪乱、東側を195に切られる。長さ140cm、幅57cm、深さ8cmを測る。染付が出土しており中世後半から近世か。

## 3) 井戸 調査区全体で8基検出した。

**SE 041 (第11図)** I区1面南側に位置する。平面形は東西に長い楕円形を呈し長径130cm、短径110cm、深さ156cmを測る。断面はほぼ垂直であるが、底面付近でややすぼまる。底面標高は0.7mで井戸の可能性が高いと思われる。染付碗・鉢、陶器甕など近世の遺物の他、7～8世紀の須恵器、古墳時代土師器、弥生時代L型口縁などが出土した。特に古墳時代の土師器が多く出土している。出土遺物(013、014)。013は染付碗底部である。見込みに「善」の字を配す。014は陶器鉢である。

**SE 158 (第11図)** I区1面南側に位置する。平面形は円形を呈し径120cm、深さ160cmを測る。断面は深さ120cmまではやや緩やかにすぼまり、底面上部は垂直である。土層観察では底面直上で壁に貼りつくような曲物の痕跡が見られた。覆土は底面から15cmは暗灰褐色土でその上は黒褐色砂質土である。底面標高は0.7mである。染付碗(015)、褐釉陶器、陶器盤、青磁などが出土した。近世前期か。

**SE 260 (第11図)** I区5面北端で検出した瓦組みの井戸である。掘方平面は南北に長い楕円形を呈し、長径82cm、短径79cm、瓦上端からの深さ40cmを測る。井筒も楕円形を呈しており、長径70cm、



第4図 調査区範囲図 (1/400)

短径60cmを測る。長さ35cm前後、幅25cm前後の瓦8枚を組み井筒とする。掘方底面の標高は0.4mである。瓦組みは1段のみであるが、SE 168 井筒の深さが45cmであることを考慮すると、もともとこの1段のみであった可能性がある。出土遺物。016は染付片、017と018は白磁碗である。近世。

SE 272(第11図) I区5面中央部に位置する。SE 260と同様に1段のみの検出である。掘方はほぼ円形を呈し、径75cmを測る。井筒は瓦6枚を組んで径50cmを測るが、端部がずれて重なるなど組み方は乱雑である。瓦は長さ、幅共に30cm程のものを使用している。掘方底面の標高は0.3mである。井筒瓦の他に白磁碗IV類口縁(019)と土師皿(020でヘラ切り)が出土した。時期は近世である。

SE 275(第11図) I区北西側に位置する瓦組みの井戸である。掘方はやや楕円形を呈し長径90cmを測る。井筒は長さ32cm強、幅25cm前後の瓦を底面から3~4cmほど浮かせて円形に並べ、掘方と井筒の隙間に割れた瓦を差し込んで井筒を安定させている。掘方底面の標高は0.6mを測る。時期は近世であるが、遺物は白磁碗V類や須恵器甕、土師質鉢、壺など古い時期の遺物のみである。

SE 280(第11図) I区2面東端部に位置する。掘方東側が調査区外に伸びるが、平面は円形を呈し

ており、径1.4m、深さ1.42mを測る。断面はやすばまりながら逆台形を呈し、底面上60cmで段がつく。井筒は瓦質の専用品で口径66cm、高さ64cmを測り、口縁部は2重口縁状に開く（第12図024）。上部構造は瓦組みで、井筒の口縁が開くのは上に井筒を乗せるための平坦面と思われたが、上部を打ち欠いた高さ15cm程の瓦を口縁外周に並べた状況で出土した。遺物（021～023）の他、掘方から棟瓦が出土した。

SE 168（第13図） I区2面中央に位置する。砂丘の西端を削るよう長径6.7m、短径4.0mの長方形に掘下げ、底面や北寄りに井筒を据える。砂丘側の東側長辺は石組みで径30～70cmの礫を2～3段ほど積んで壁を構築している。現状は2段積みで高さが50cmほどしか遺存していないが、本来は1m程あったものと思われる。井筒を中心として約1.7mの範囲を10cm前後掘下げ、更に径80cmの円形に掘下げて井筒を据える。井筒は瓦質鉢（第14図043）で下端を打ち欠いて使用、口径81cm、高さは現状で46cmを測る。器壁の厚さは1.5cmである。色調は暗灰色を呈し、口縁上面に「大」の字の線刻が見られる。底面標高は0.3mである。土坑掘方内はレンズ状の堆積で、東側からの流れ込みが多い。上層では近世陶磁器などが多く出土した。井戸桶周囲の掘方平坦地はなんらかの作業場か。SE 260や272、275など西側旧河川底面で出土した瓦を一段組んだ井戸は、上部構造が破壊されたのではなく、旧河川底面に掘った周囲の平坦地を作業スペースとする井戸であったと思われる。用途としては限定できないが周囲では旧河川底面に水田もしくは畑を作っており、それらへ水を供給する役目なども考えられる。出土遺物（第13・14図025～042）。025～028は掘方上層から出土した。025は陶器壺である。内面に白褐色のガラスが付着する。埴輪として使用している。026は象嵌青磁、027は土製鉢片、028は瓦玉である。029～042は下層から、031は井筒内から出土した。029・030は染付皿、031は青白磁皿、032は陶器碗、033は陶器擂鉢、034は常滑焼の壺である。035・036は白磁、037は須恵質の壺口縁で暗灰色を呈し胎土には白色砂と黒色粒を少量含む。高麗陶器か、038は復元口径6cm程、残存高2.3cmを測り淡灰褐色を呈す。胎土中に細砂を少量含む。調整は手捏ねで内面に黒色の付着物が付く。埴輪か。埋蔵文化財センターの分析では、青銅を検出した。039は人形の頭部である。淡黄褐色を呈し砂粒を少量含む。焼成は軟質。大きく口を横に開いており両側に牙を持つ。鬼の頭部か。下面是破損しておらず胴部へ差し込むものと思われる。041・042は土製鉢である。

#### 4) 土坑

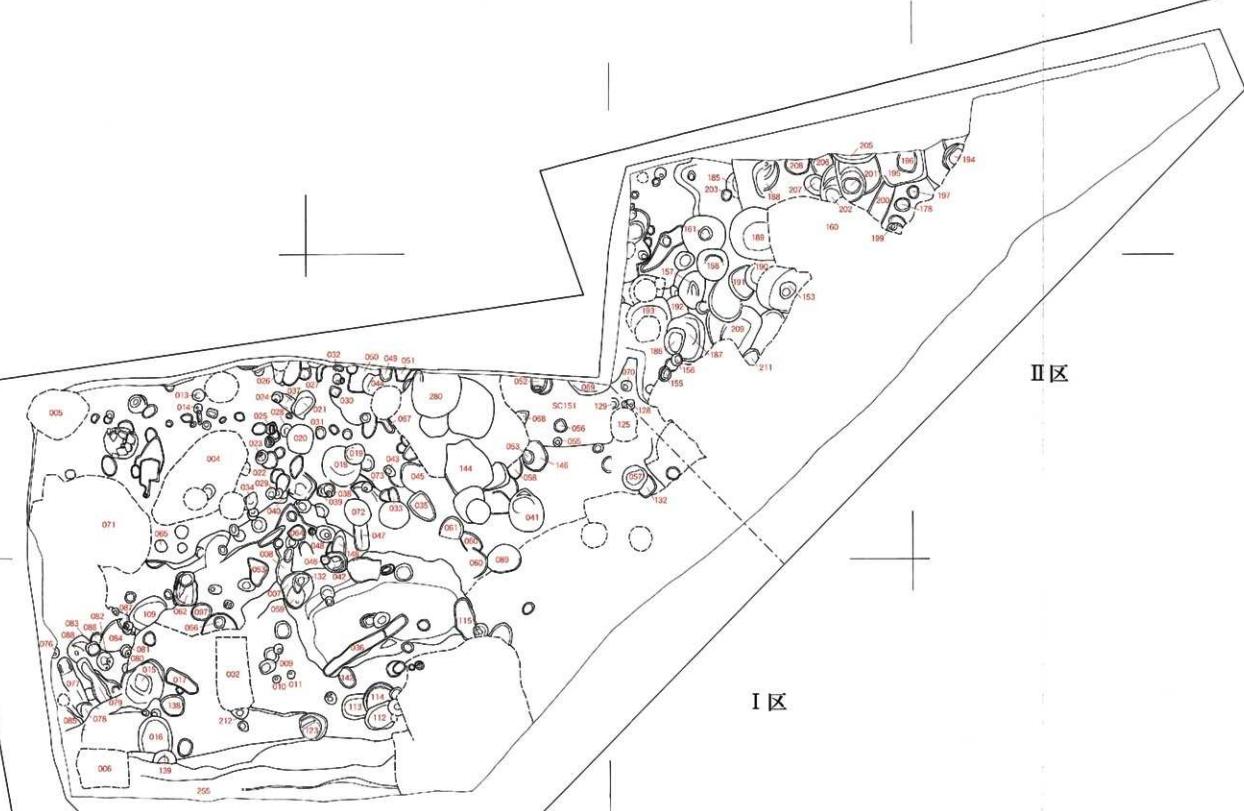
##### (1) 古墳時代

SK 044（第15図） I区1面東端に位置する。北側以外は切られているが、現状で南北1.3m以上、東西80cm前後、深さ34cmを測る。土師器片が20点程と螭壺片が出土した。出土遺物（第18図045・046）。045は土師壺口縁で「く」の字に立ち上がる。046は壺口縁で淡黄赤褐色を呈す。古墳時代前期。

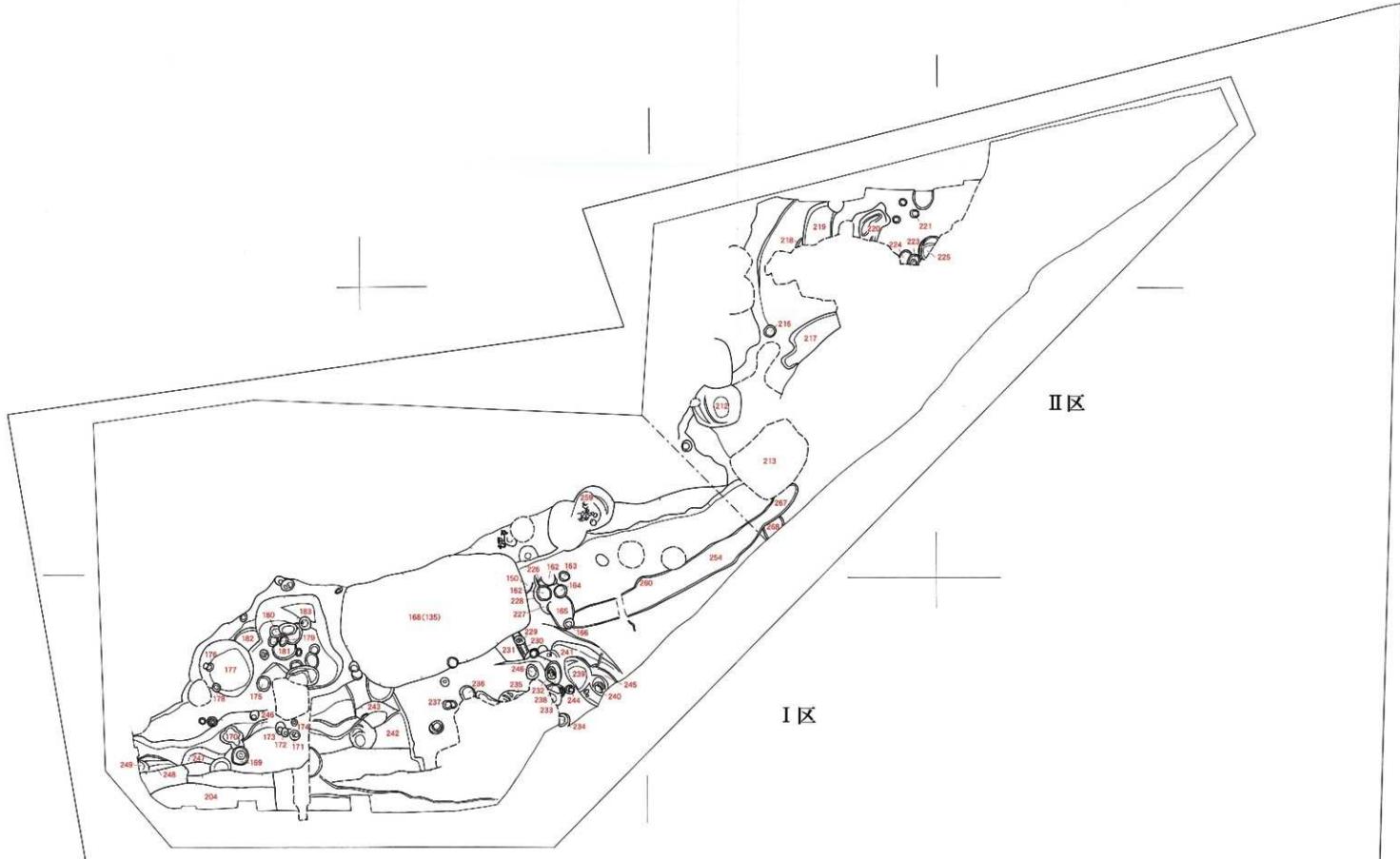
SK 069（第15図） I区1面東南端に位置する。東側が調査区外に伸びるが、平面は円形もしくは梢円形を呈すと思われる。現状で南北1.4m、東西45cm、深さ37cmを測る。二重口縁壺、土師壺、小型丸底壺が出土した。出土遺物（第18図047・048）。047は二重口縁壺、048は長径壺である。古墳時代前期。

##### (2) 中世～近世

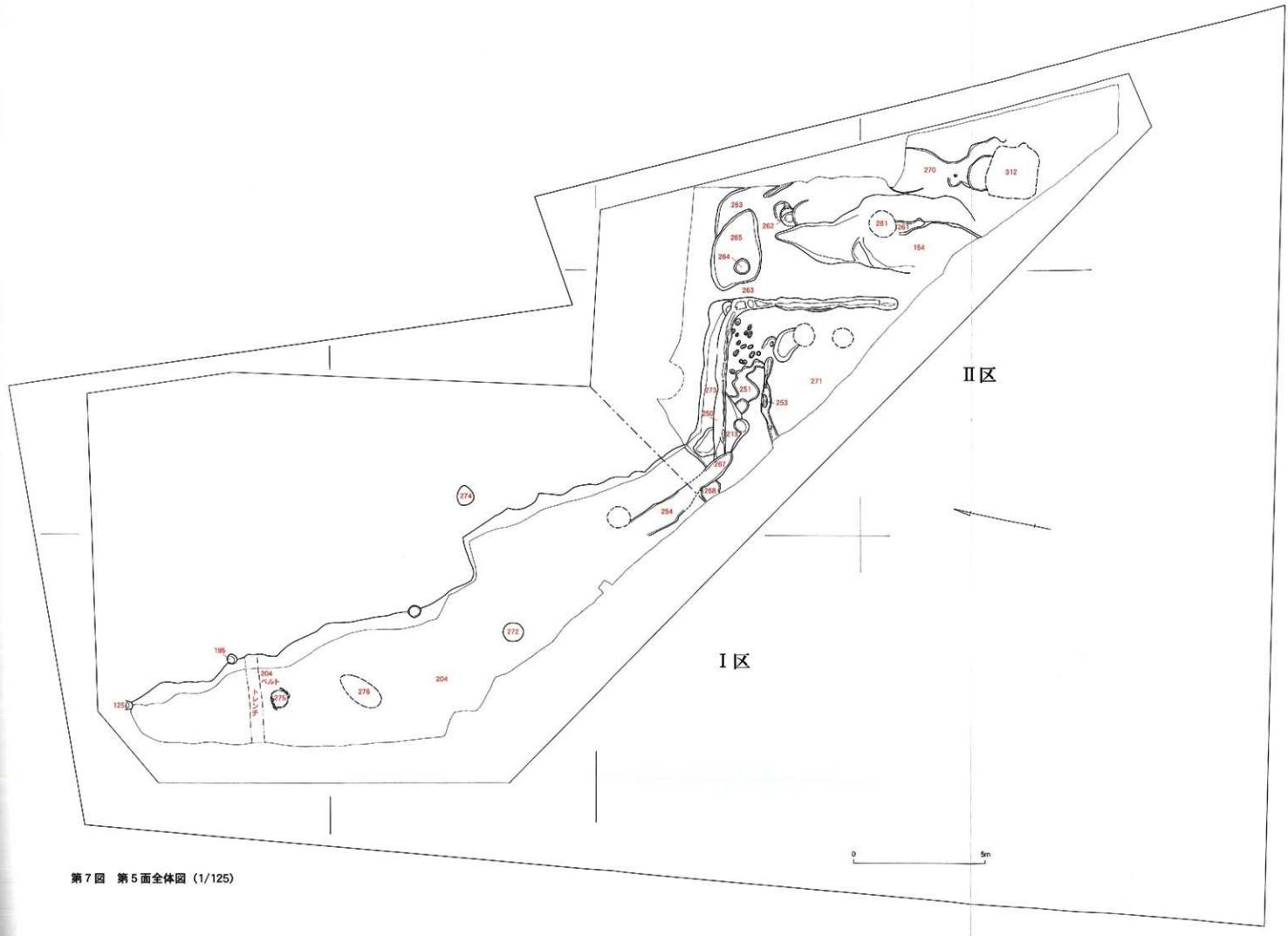
SK 015（第15図） I区1面北西端に位置し、主軸をN-67°-Wにとる。長径156cm、短径142cm、深さ52cmを測る。東西両端にテラスを持ち、底面から25cm上で段が付き、それから上は断面浅皿状、下は逆台形を呈す。龍泉窯系青磁碗、白磁碗IV・V類、陶器鉢I-1bなどが出土した。出土遺物（第



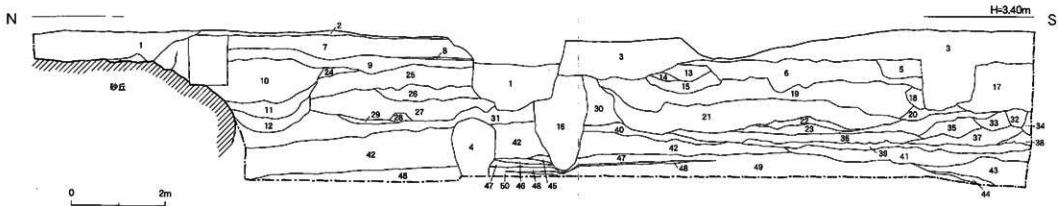
第5図 第1・2面全体図 (1/125)



第6図 第3・4面全体図 (1/125)

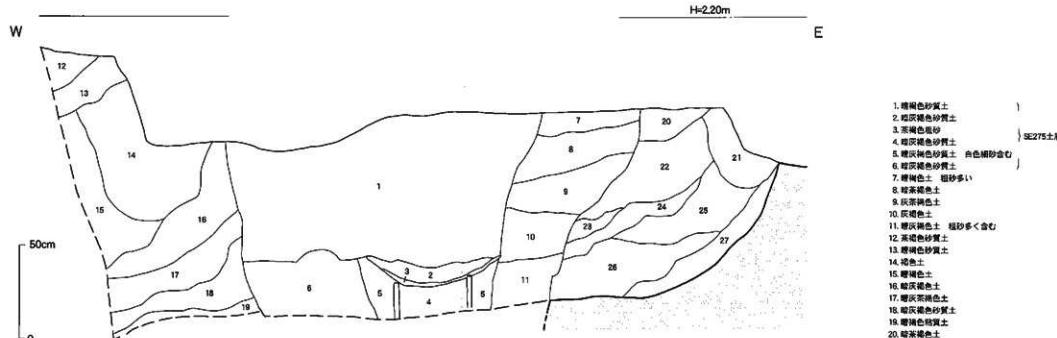


第7図 第5面全体図 (1/125)



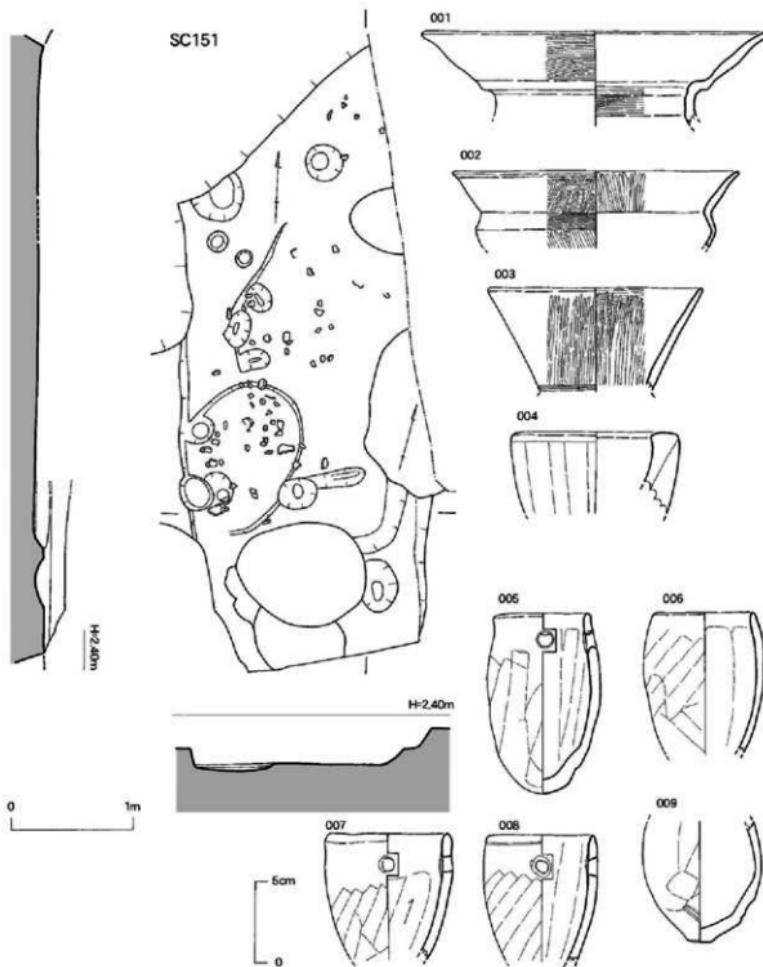
第8図 II区東壁土層図 (1/60)

- 1. 砂丘
- 2. 砂質土
- 3. 黄褐色土 (近代～現代)
- 4. 井戸 (近代)
- 5. 黄褐色土 ガラマジリ
- 6. 黄褐色土 腐化物水がれを無理に多量に含む
- 7. 黄褐色土 ガラマジリ
- 8. 黄褐色土
- 9. 黄褐色土 近代
- 10. 黄褐色土
- 11. 黄褐色砂質土
- 12. 黄褐色質土 地山移を源状に含む
- 13. 黄褐色土 腐化物片を多量に含む
- 14. 黄褐色土
- 15. 黄褐色土 腐化物は13層より少ない
- 16. 黄褐色土 井戸質土
- 17. 黄褐色土
- 18. 黄褐色砂質土 白色砂多く含む
- 19. 黄褐色砂質土 塩分、鉄分等の外因性
- 20. 黄褐色土 腐化物片を含む
- 21. 黄褐色土 土塊片、片状を多量に含む
- 22. 黄褐色細砂
- 23. 黄褐色砂土 クーストを含む
- 24. 黄褐色土 近代
- 25. 黄褐色土 褐色多く含む
- 26. 黄褐色砂質土 混じて含む
- 27. 黄褐色砂質土 25層と明るい
- 28. 黄褐色細砂
- 29. 黄褐色砂質土 鹿毛色を少含む
- 30. 黄褐色土 砂粒多く含む
- 31. 黄褐色土 砂粒と中砂の互層
- 32. 黄褐色砂質土 直角を多量に含む
- 33. 黄褐色土 下層は砂を多量に含む
- 34. 黄褐色土
- 35. 黄褐色土 白色砂多く含む
- 36. 黄褐色土 布がれ量多く含む
- 37. 黄褐色砂 耕性 (褐灰褐色土) を耕すにはさむ
- 38. 黄褐色土砂 (耕作土) 褐灰褐色土 (耕作土) を間にはさむ、足跡状の認みあり
- 39. 細粒褐色土 (耕作土)
- 40. 黄褐色砂質土 中砂と細砂を混じる
- 41. 黄褐色砂質土
- 42. 黄褐色土 砂粒と中砂の互層で下層ほど大きい
- 43. 黄褐色砂り 30cm以上の互層
- 44. 黄褐色土 褐色のベトベトした土 土塊片と砂を多量に含む
- 45. 黄褐色砂土 岩場堆積
- 46. 黄褐色シルト
- 47. 黄褐色シルト
- 48. 黄褐色シルト
- 49. 黄褐色土層 (粗砂と細砂の互層)
- 50. 黄褐色シルト



第8図 SX204ベルト土層図 (1/20)

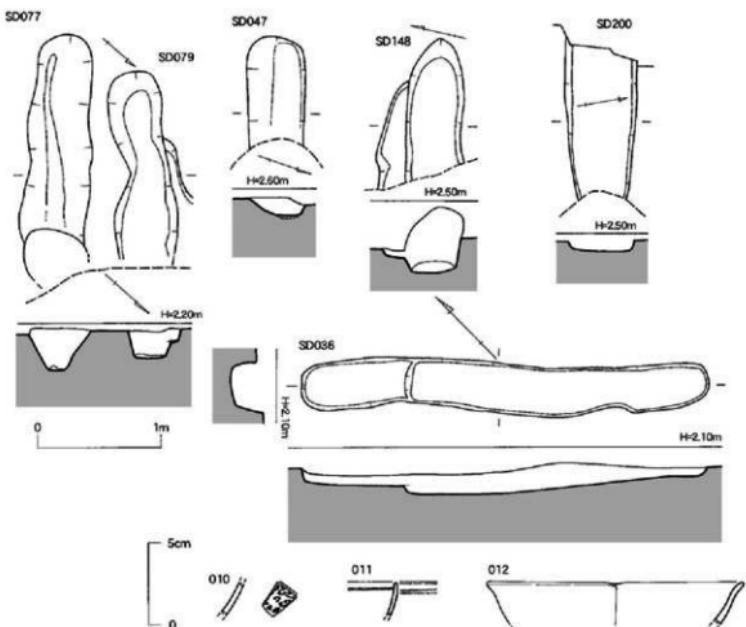
- 1. 暗褐色砂質土
- 2. 暗褐色細砂質土
- 3. 暗褐色細砂
- 4. 暗褐色砂質土
- 5. 暗褐色細砂質土 白色砂多く含む
- 6. 暗褐色細砂質土
- 7. 暗褐色土 細砂多い
- 8. 暗茶褐色土
- 9. 暗茶褐色土
- 10. 暗褐色土
- 11. 暗灰褐色土 細砂多く含む
- 12. 暗褐色細砂土
- 13. 暗褐色細砂土
- 14. 暗褐色土
- 15. 暗褐色土
- 16. 暗灰褐色土
- 17. 暗灰褐色土
- 18. 暗灰褐色砂質土
- 19. 暗褐色砂質土
- 20. 暗褐色土
- 21. 暗褐色土
- 22. 暗茶褐色土
- 23. 暗褐色土
- 24. 暗褐色土
- 25. 暗灰褐色土
- 26. 暗褐色土
- 27. 暗茶褐色土



第9図 SC 151遺構・遺物実測図 (1/40・1/3)

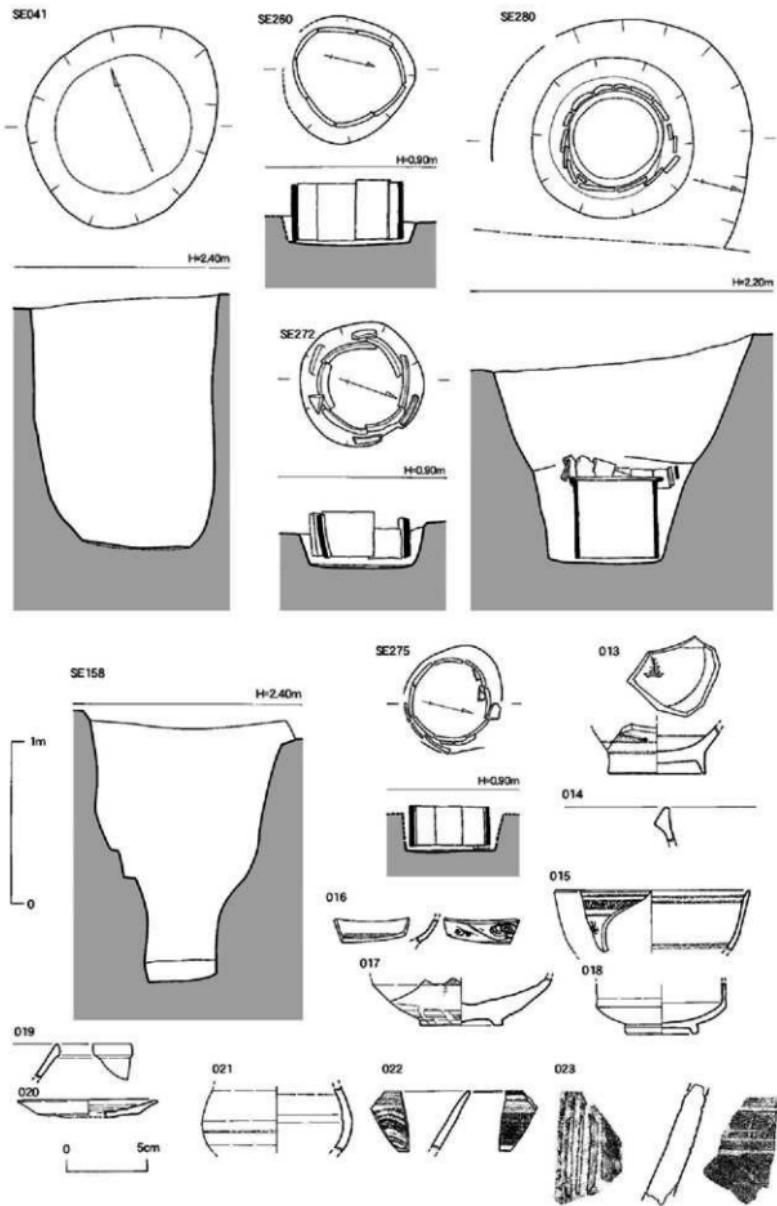
18図049～057)。049は染付碗、050は陶器鉢、051は陶器甕である。052は青磁で内面は口縁を除き露胎である。053は陶器鉢I類、054は瓦質插鉢、055は土製品である。056・057は砂岩製で057には断面V字の掘り込みが見られる。再利用品と思われる。中世後半～近世か。

SK 018(第15図) I区面中央に位置する。平面は梢円形を呈し長径137cm、深さ36cmを測る。断面は浅皿状を呈し底径73cmを測る。出土遺物(061～064)。061は白磁である。062は土師坏、063

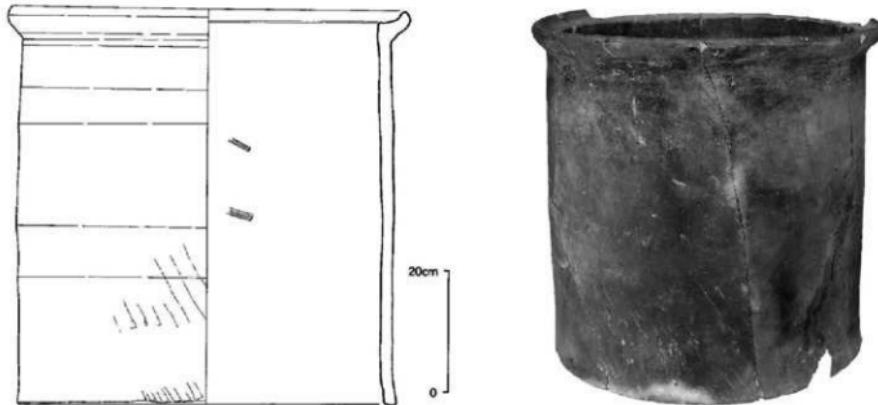


第10図 溝・遺構・遺物実測図 (1/40・1/3)

- は土師皿でいずれも糸切りである。064は瓦片である。いずれも小片のみの出土である。中世か。
- SK 109(第15図) I区2面北端部に位置する。長径106cm、深さ13cmを測る。断面は浅皿状を呈す。白磁碗V類、白磁輪花碗、陶器片、土師坏・皿(糸切り)などが出土した。13~14世紀か。
- SK 157(第15図) II区2面北端に位置する。南側をSK 158等に切られているが、現状で長径150cm以上、深さ66cmを測る。龍泉窯系青磁片、白磁碗、土師坏(糸切り)等が出土した。13世紀か。
- SK 161(第15図) II区2面北端に位置する。平面は南北にやや長い楕円形で長径150cm、深さ79cmを測る。西側にテラスをもち、東側が下がる。南端は掘りすぎである。染付、白磁皿、国産陶器甕片、土師皿(糸切り)などの他、古代の須恵器高台付坏、滑石片などが出土した。出土遺物(第18図065~067)。065は陶器、066・067は軒丸瓦である。中世後半か。
- SK 177(第15図) I区3面北端に位置する。平面は円形で径190cm強、深さ43cmを測る。白磁瓶、白磁碗、陶器盤、土師坏・皿(糸切り)、土師楢、瓦器片が出土した。出土遺物(第18図058~060)。058は陶器である。坏部内面は施釉するが、外面は口縁以外は露胎である。059・060は糸切りで、059は板状压痕が見られる。060は口縁が黒く煤ける。灯明皿である。12~13世紀か。
- SK 189(第15図) II区3面北側に位置し、西側を櫻乱に切られる。南北172cm、深さ53cmを測る。断面は逆台形を呈す。白磁片、陶器片、土師坏・皿(糸切り)、瓦質擂鉢等が出土した。中世後半か。
- SK 191(第15図) II区3面北側に位置する。長径106cm、深さ16cmを測る。断面浅皿型を呈す。白磁片、須恵器甕の他、須恵器坏(6C)、土師器甕(古墳時代)、円筒埴輪が出土した。中世前半か。
- SK 202(第15図) II区3面中央東端に位置する。現状で南北125cm以上深さ46cmを測る。南側に



第11図 井戸 造構・遺物実測図 (1/30・1/3)



第12図 SE 280 井筒実測図 (1/8)

テラスが2段付き、北側へ下がる階段状を有す。磁器瓶、陶器耳壺、瓦質火鉢（第18図072）、土師壺等の他に古墳時代の土師器甕、土師器壺突帶部が出土した。中世後半か。

SK 212（第16図） II区4面北端に位置する。平面は南北に長い卵丸長方形を呈し長径172cm、深さ43cmを測る。白磁片、国産陶器甕、須恵器壺蓋、婧壺、円筒埴輪などが出土した。11～12世紀。

SK 220（第16図） II区4面東端に位置する。平面は東西に長い不正型で幅103cm、深さ38cmを測る。底面中央に幅23cmの溝状掘り込みがある。白磁碗II類、陶器盤、陶器大甕、須恵器高台付き壺、土師壺・皿（糸切り）、瓦質掘り鉢などが出土した。12～14世紀か。

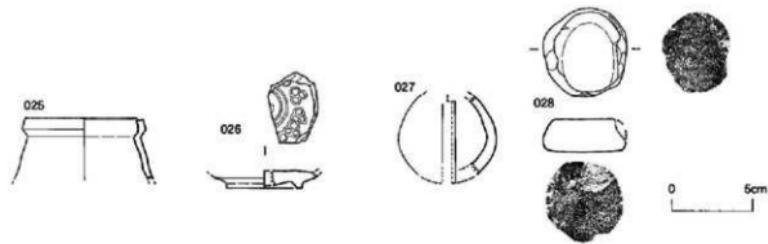
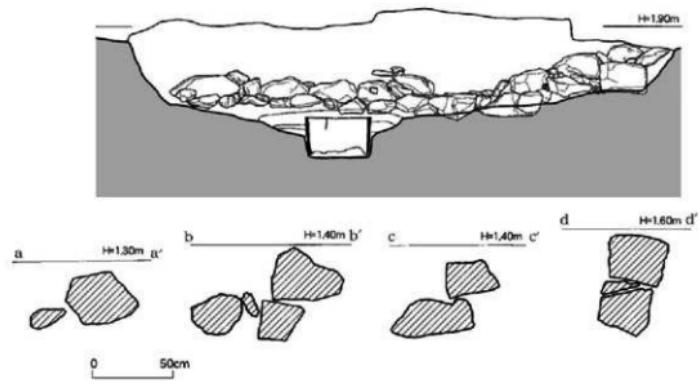
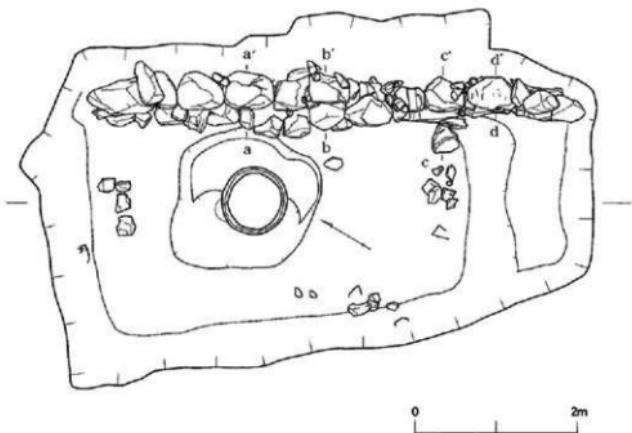
SK 241（第16図） I区4面中央部西端に位置する。南北に長いが西側は削平を受けている。現状で南北2.5m以上、深さ23cmを測る。青磁片、白磁片、染付片、土師壺（糸切り）、瓦（須恵質）などが出たが小片のみで時期決定は困難である。出土遺物（第18図078・079）。どちらも糸切りの土師壺で、078は板状瓦瓶がある。079は灯明皿である。近世に降る遺物が無いことから中世と考えられる。

SK 243（第16図） I区4面中央に位置する。2方を削平され掘方平面は不明である。現状で東西1m以上、深さ30cmを測る。龍泉窯系青磁碗I類、白磁碗IV類、白磁皿VI類、白磁皿IX類、陶器擂鉢、土師壺（糸切り）などが出土した。14世紀と考えられる。

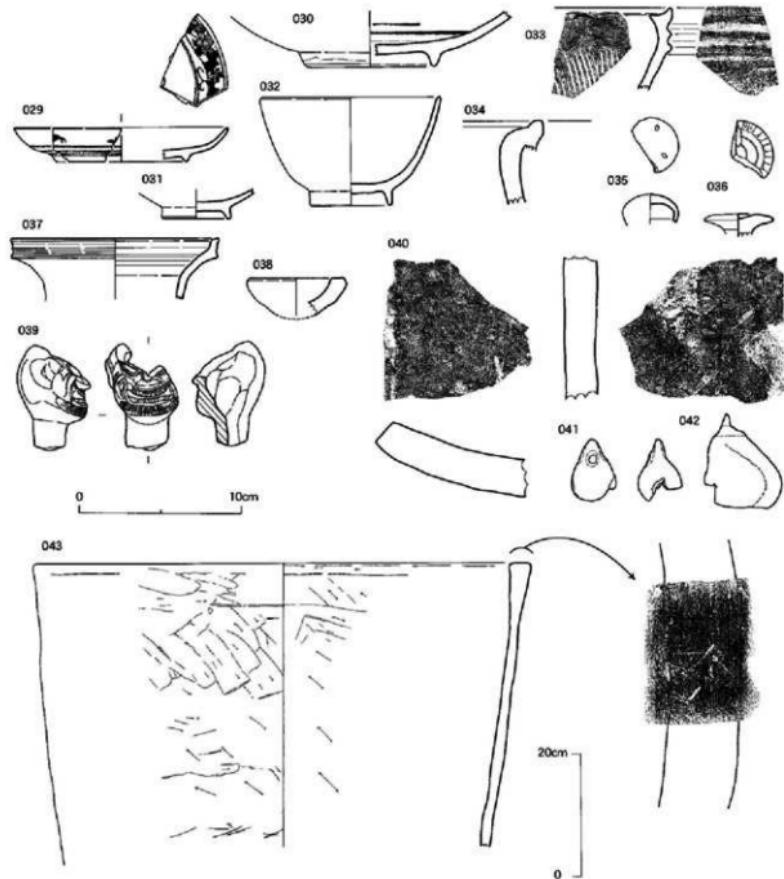
SK 247（第16図） I区4面北端に位置する。現状で南北130cm以上、深さ46cm以上を測る。土師壺（糸切り）、土師甕片が出土した。小片のみで時期決定は困難である。中世か。

SK 259（第16図） I区4面南側に位置する。平面は東西に長い楕円形を呈し長径162cm、深さ98cmを測る。深さ40cmまではやや緩やかな傾斜でその下は断面V字型を呈す。その境界近辺で径20cmほどの礫がまとまって出土した。他にも北西側3mの地点でも同様に礫が集中して出土しており根石の可能性が考えられる。白磁碗IV類、陶磁器、須恵器甕、婧壺、円筒埴輪等、古墳時代から古代にかけての遺物も多く出土した。11～12世紀か。

SK 209（第16図） II区3面北側に位置する。平面は不整形で東西長180cm、深さ43cmを測る。遺物は近世の可能性がある陶器碗の他、白磁碗II・X I類、須恵質擂鉢、瓦等が出土した。近世か。



第13図 SE 168 遺構・遺物実測図 (1/60・1/30・1/3)



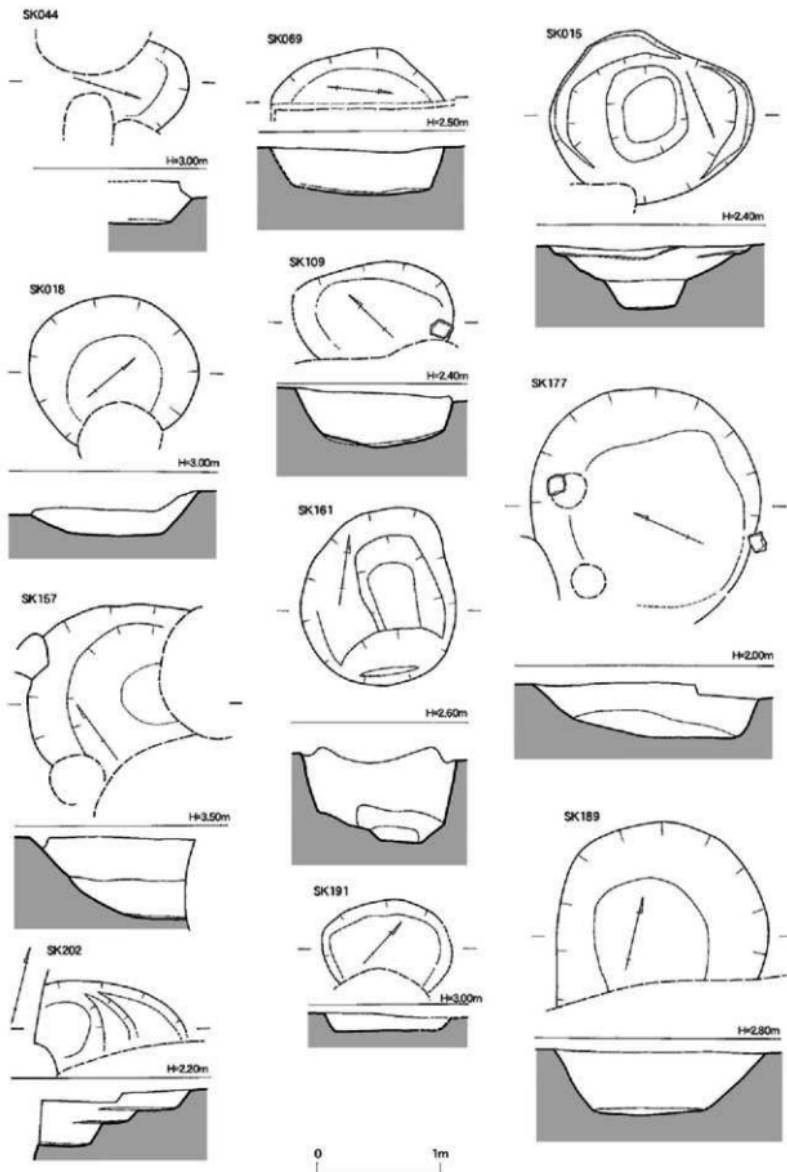
第14図 SE 168 遺物実測図 (1/3・1/8)

SK 217 (第16図) II区4面北側に位置する。現状で東西長253cm、深さ23cmを測る。染付碗の他、白磁皿IX類、陶器大甕、瓦片等が出土した。近世か。

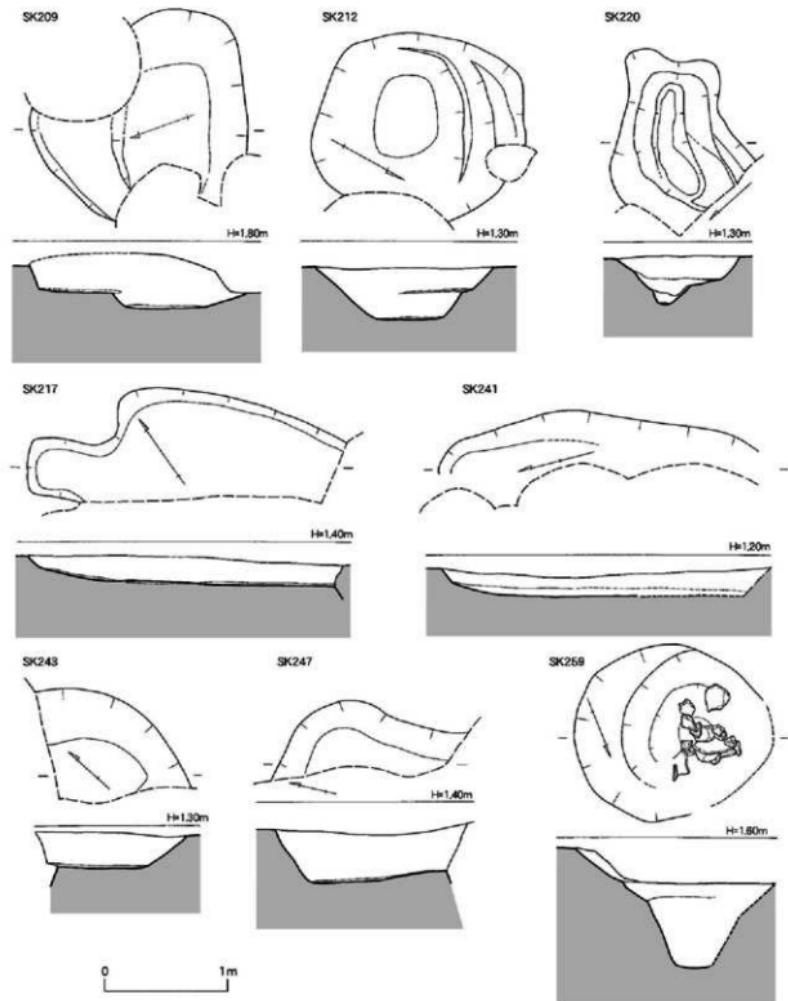
### (3) 不明遺構

SK 144 (第17図) I区4面南側に位置しN-36°-Eを測る。平面は長方形を呈し長径86cm、短径73cm、深さ83cmを測る。深さ57cmで北側にテラスを持ち、下段は方形(52cm前後)を呈す。井戸の可能性もあるが底面標高は1.4mとやや高い。下段を木板で囲んだ倉庫か。テラスに瓦を敷いている。覆土中から染付小碗、陶器碗、陶器皿や七輪とともに円筒埴輪など古墳時代や古代の遺物が出土した。

SK 187 (第17図) II区3面北側に位置する。平面は東西に長い楕円形を呈し、主軸をN-88°-Eにとる。長径174cm、深さ126cmを測る。深さ83cmまで掘り下げた後、底面東側を径94cm、深さ43cmに掘り下げる。底面から2~8cm浮いた状態で瓦が2枚出土した。底面標高は0.5mを測る。井



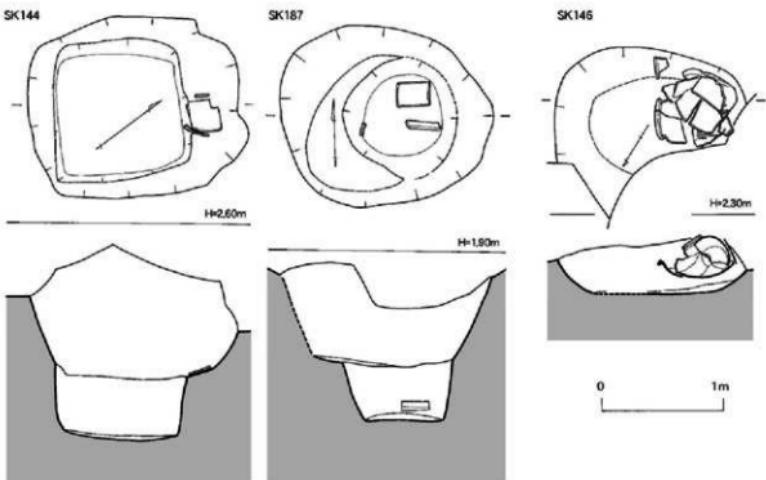
第15図 土坑実測図1(1/40)



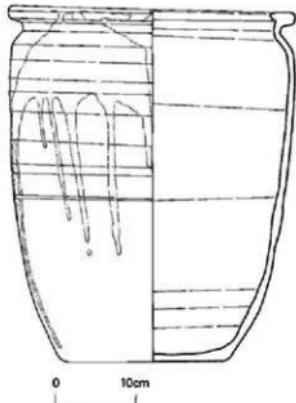
第16図 土坑実測図2(1/40)

戸の可能性があるが、土層観察では井筒等は検出できなかった。出土遺物(第18図068~071)。068は土師皿(糸切り)である。069は瓦質擂鉢、070は須恵器で底部に線刻が、071は土師質甕で外面に線刻あり。

SK146(第17図) I区3面南側に位置する。長径116cm、深さ36cmを測る。掘方西端では底面から10cm浮いた状態で横倒しになって割れた陶器甕(第17図044)が出土した。甕は破片の位置関係から割れた状態で埋められたことが判る。人骨は出土していないが、頸部に甕を被せるなどの埋葬



044



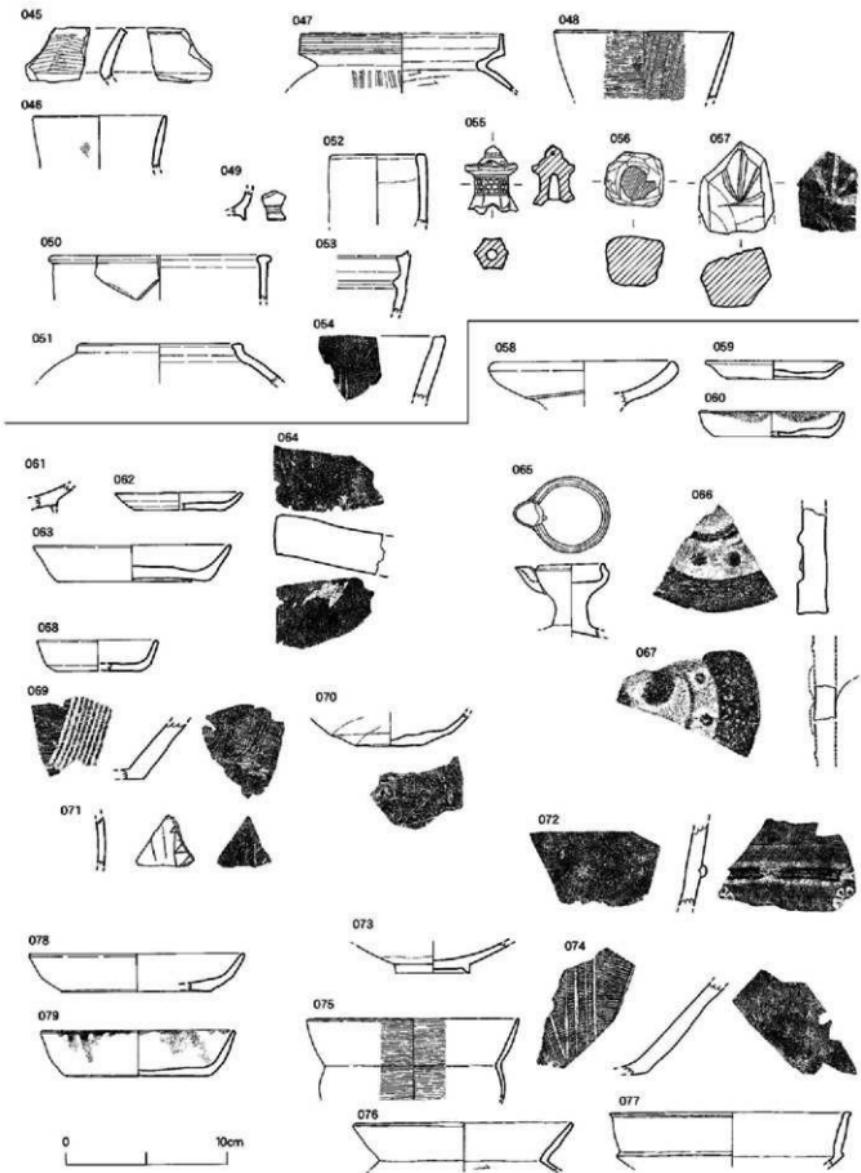
第17図 土坑実測図3(1/40・1/6)

土坑である可能性が考えられる。口径34cm、高さ41.3cmを測る。黄褐色を呈し、口縁と肩部に白色釉がかかる。

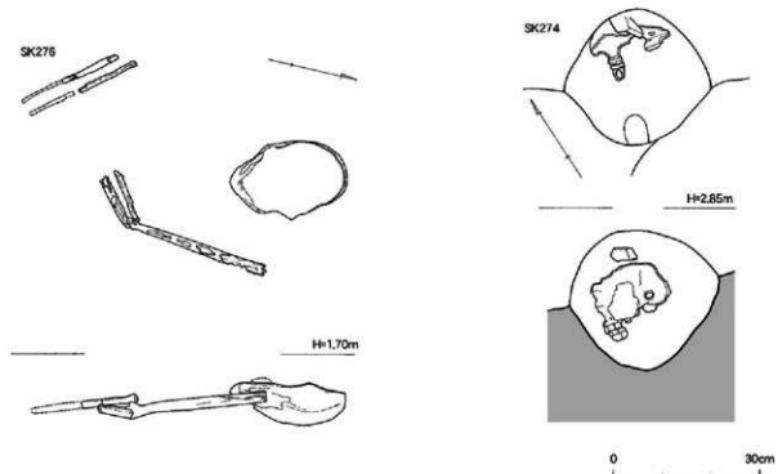
5) 墓 埋葬構造を2基確認した。東側の第182次調査でも旧河川堆積上で中世の人骨が検出されており、御笠川が東側に流路を変えた後の河原は都市の領域外として死体を廃棄する場として認識されていたものと思われる。

SK 274(第19図) I区2面中央に位置する。径30cm、深さ28cmの柱穴状掘り込みから頭蓋骨のみが出土した。掘方径から頭蓋骨のみの埋葬と思われる。頭蓋骨は顔面を西に向いた状態で埋められている。壊乱により左側が削平されているが上顎と下顎が噛み合った状態で出土しており、生前の状態で埋葬されている。遺物は土器小片のみで時期は不明である。

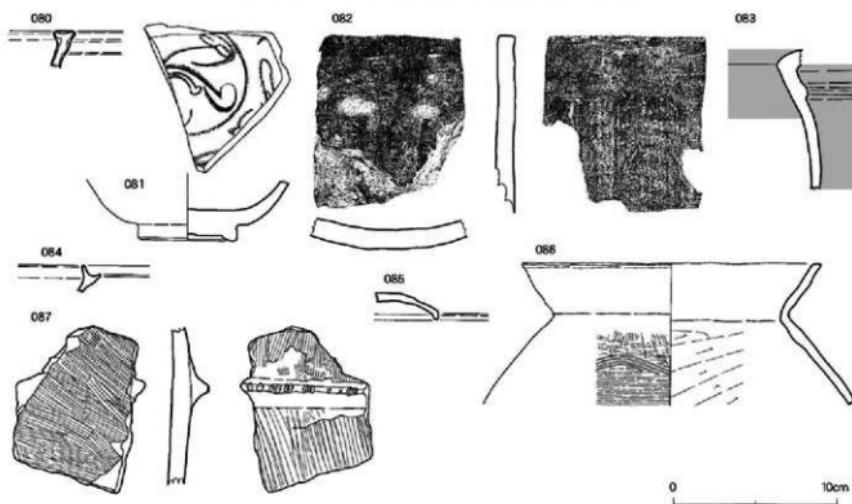
SK 276(第19図) I区西側の河川堆積の粗砂中で検出した。墓壙の掘り込みは確認できなかったが、出土状況から溺死等ではなく、埋葬されたものと思われる。人骨は遺存状態が悪く、頭蓋骨の顔面を除いた部分(顔面は削平により欠損)と左腕の上腕骨(近位端欠損)と桡骨と尺骨(共に近位端のみ)、右腕が桡骨と尺骨(遠位端欠損)のみが遺存していた。出土状況から頭位を北にして、顔を西側に向けていたものと考えられる。人骨が出土した下からは第20図の080～087が出土した。古墳時代から中世前半までの遺物が含まれており、この後御笠川が博多の東側を流れようになると、干上がった河原が墓域となったものと思われる。



第18図 土坑出土遺物実測図 (1/3)



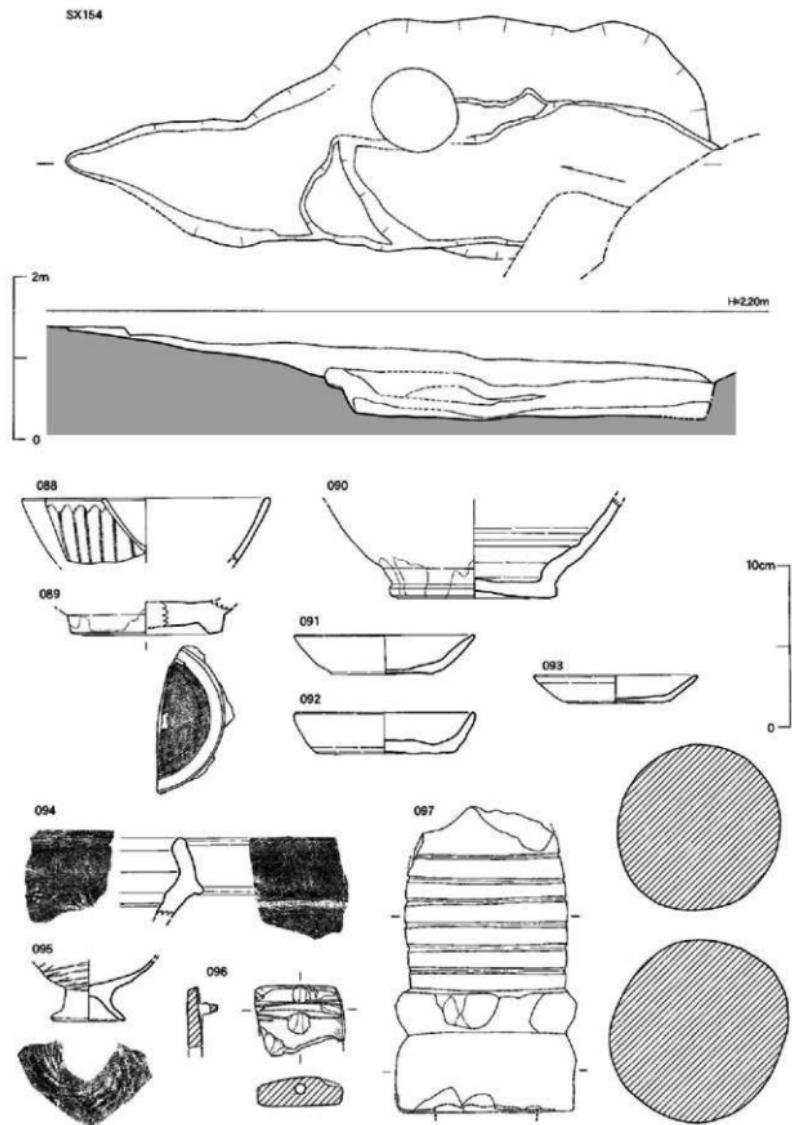
第19図 SK 274・276 人骨出土状況実測図 (1/10)



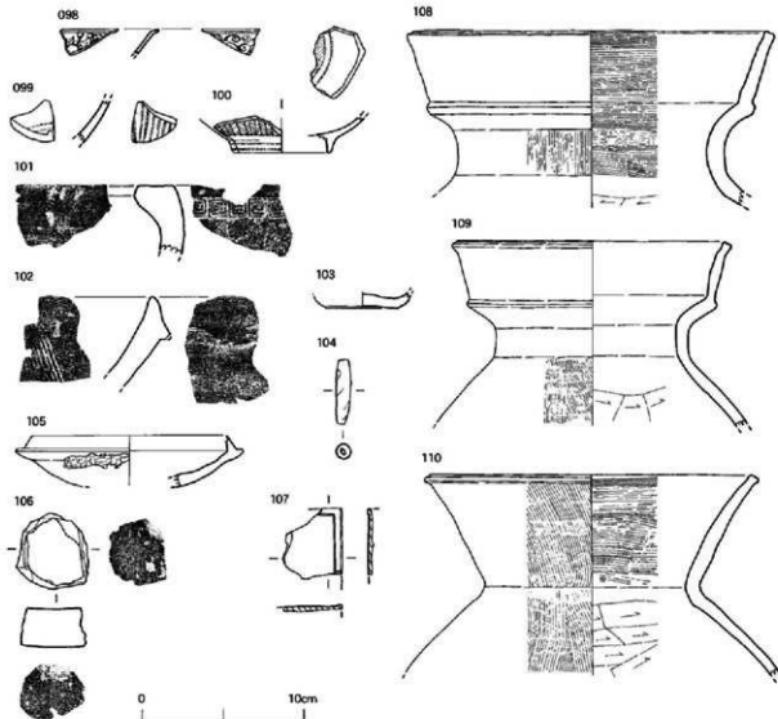
第20図 人骨横トレンチ出土遺物実測図 (1/3)

6) 流路 II区南側で砂丘上から南側の旧河川に向かって流れる流路を1条確認した。

SX 154 (第21図) II区5面南側で検出した北から南に向かって流れる流路である。北側は砂丘が削平されたため遺存していない。覆土中から多量の角縞と遺物が出土した(088～097)。088は龍泉窯系青磁碗、089・090は白磁である。089は外底部に墨が残る。091～093は糸切りである。094



第21図 SX154遺構・遺物実測図 (1/60・1/3)



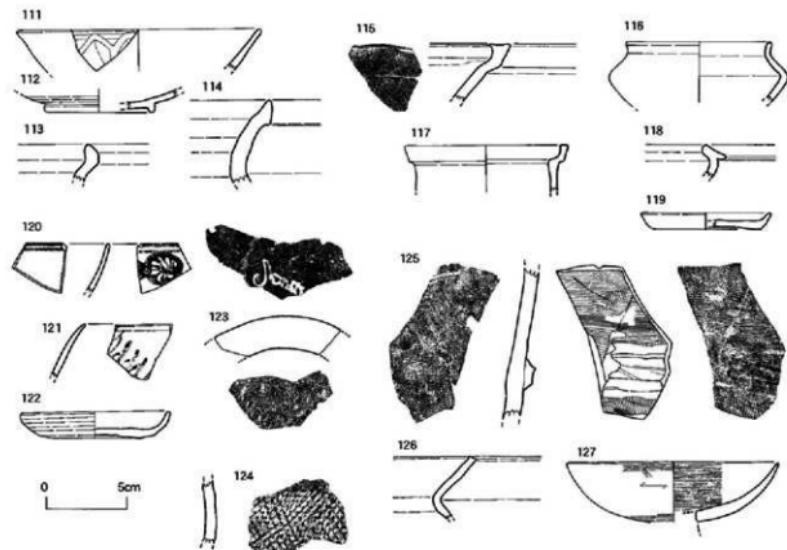
第22図 SX 204出土遺物実測図 (1/3)

は備前擂鉢、095は土師質高坏、096は滑石製品である。石鍋の再利用品で取手に孔を穿つ。097は砂岩製の相輪部である。径10cmを測る。この他天目碗や瓦質擂鉢など貿易陶磁や国产陶器、瓦器、土師器と共にイヌ頭蓋骨やイルカ等の獣骨も出土した。15世紀頃か。

#### 7) その他の遺構

SX 204(第6図)旧河川である。前述したように当調査区と西側のキャナルシティの間は河川の流路である。河川堆積の粗砂中には第20図の様に中世前半までの遺物が含まれている。これらは河川が上流で削った遺構に含まれていた遺物であるが、河川が西側に狭まった後、砂丘上からの流れ込みや埋立てによって持ち込まれたのが第22図の遺物である。こちらにも古墳時代前期の土師器や6世紀頃の須恵器坏なども含まれるが、染付などの中世後半から近世の遺物も含まれる。

房州堀(第8図上)御笠川の旧河道である。現在は博多駅の東側から石堂川と名を変えて博多湾にそそぐ。伝承では戦国期に川の付け替えが行われ、石堂川は博多の東の堀に、旧河川は南の守りとされたという。遺跡分布図では敷地南側の小道が房州堀の北端とされていたが、河口部で八の字に広がっているものと思われる。明治に埋立てられているが、覆土からは近世から近代の陶磁や焼けた石炭状のものが多量に出土した。またその下層に位置する河川堆積の粗砂層からは多量の古墳時代前期の土



第23図 水田(稻)出土遺物実測図(1/3)

師器や円筒埴輪片、後期の須恵器、古代の瓦や須恵器、中世の瓦質土器などが多量に出土している(第24図128~152)。どれもローリングを受けておらず近くからもたらされたと考えられるが、その中に円筒埴輪も含まれるため近くに埴輪を作ったような古墳が存在した可能性が高いと考えられる。

SD 250(第7図) II区5面北側で検出した東西方向の溝で主軸をN-77°-Eにとる。幅40~50cm、深さ20~30cmを測る。東端部は緩やかなカーブを描きながら南に曲がる。SD 273とほぼ重なる。

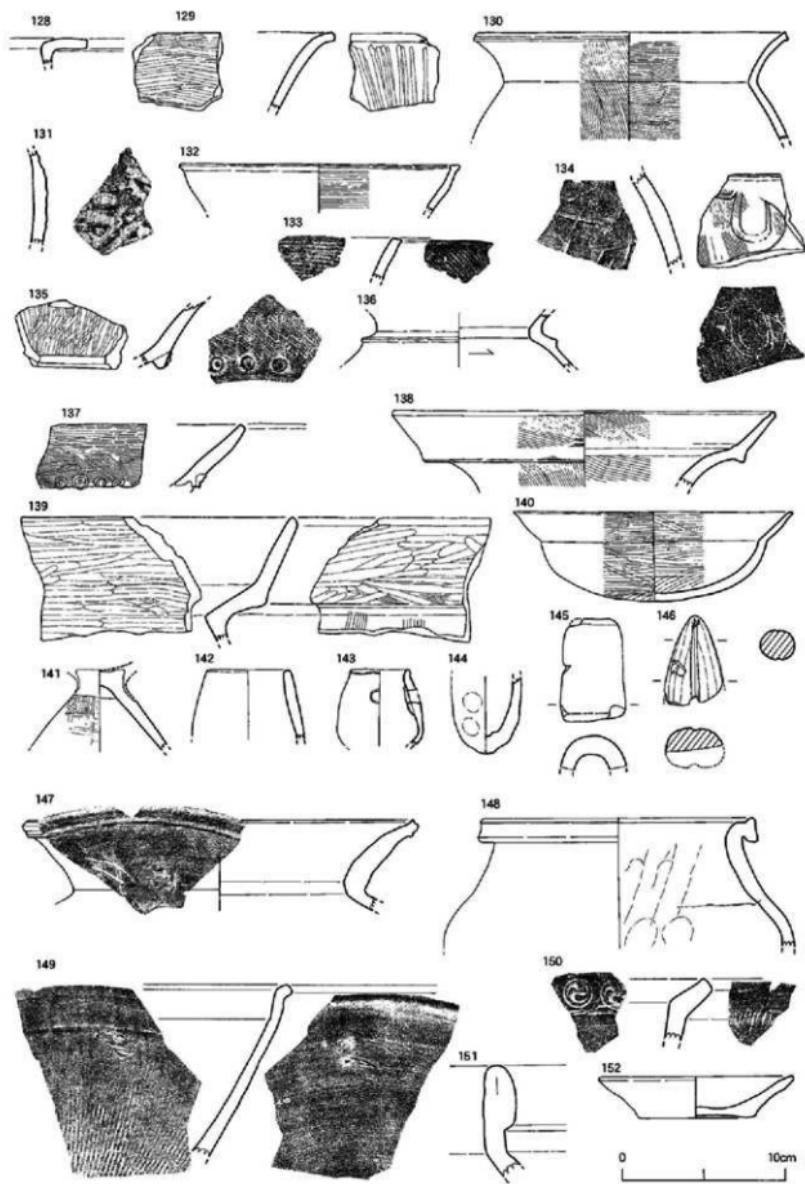
SD 273(第7図) SD 250の下層で検出した。調査区内でL字型をなす溝である。幅80cm、深さ15~20cmを測る。溝内で木杭列を検出した。壁の崩落防止の為と考えられる。近世前半の『福岡御城下絵図』によると房州堀は水田として描かれており、SD 250・273は絵図と同様に水田化していたことを示す。

SX 271(第7図) 水田面である。黒褐色を呈す砂質土層で河川堆積のシルト層の直上にのる。黒褐色土の下で、動物の足痕を検出した(図版10-3)。

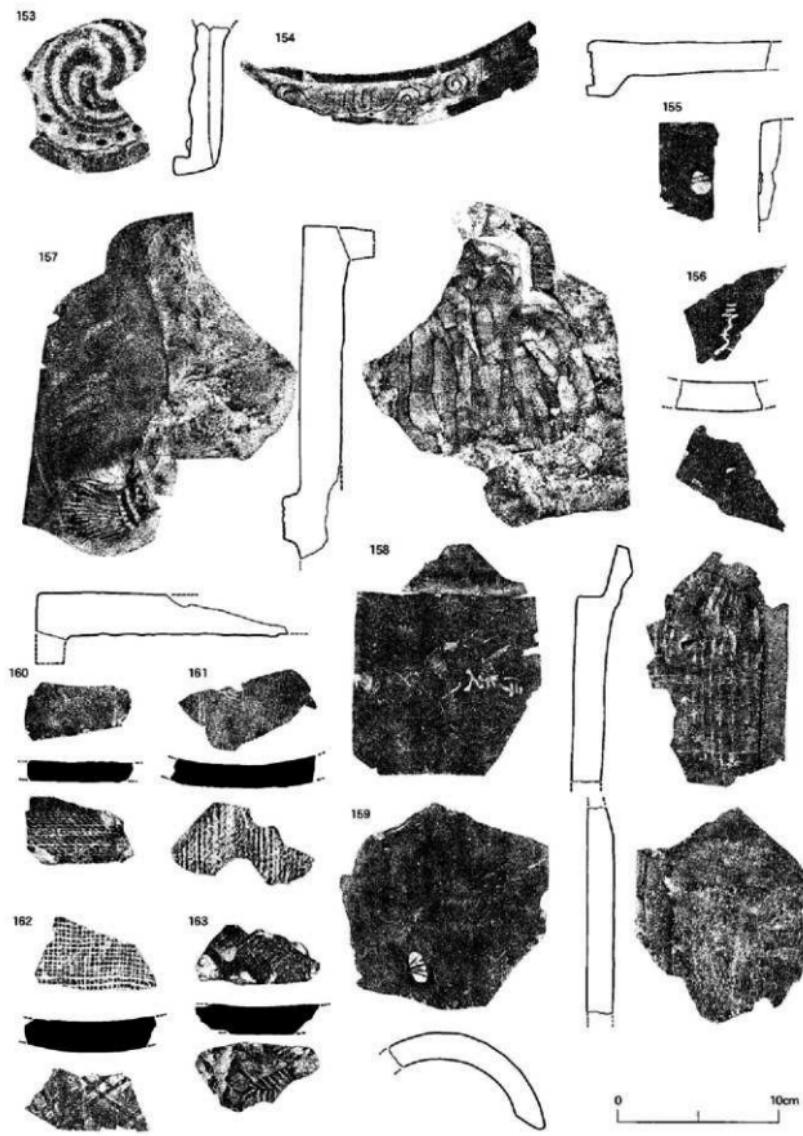
#### 8) それ以外の遺物

(1) 瓦(第25図) 調査区全体から多く出土した。153は巴文の瓦当である。154は平瓦の瓦当である。細い線で唐草文を施す。155・156は瓦質平瓦片である。155は鈴のような、156は文字のスタンプを施す。共に生産者を現していると考えられる。157は鬼瓦である。文様の大半は剥落しているが左下に魚の鱗もしくは紐状の文様が残る。158・159は丸瓦である。外側にスタンプを施す。160~163は須恵質の瓦片である。160~161は凸面が網目タタキ、凹面はこまか布状圧痕である。162は凸面が格子タタキで、凹面が粗い布状圧痕。163は凸面が平行タタキ、凹面が粗い布状圧痕である。

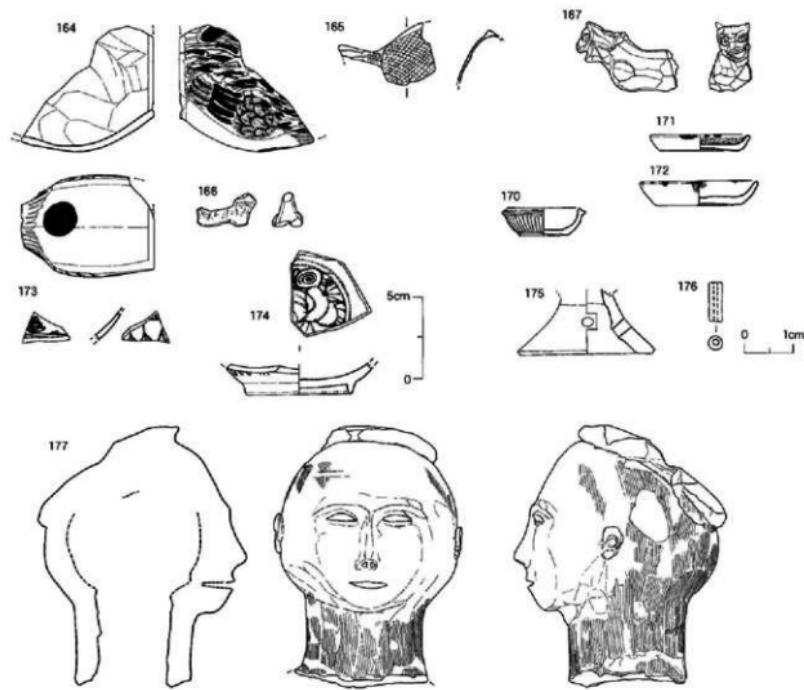
(2) その他(第26図) 164~166は090から出土した。164は鳥型磁器製品である。羽と下側の円は赤褐色で塗られる。尾羽は盛り上がっているものの、尾部は垂直に切られており、蚊取り線香を焚



第24図 河川出土遺物実測図 (1/3)



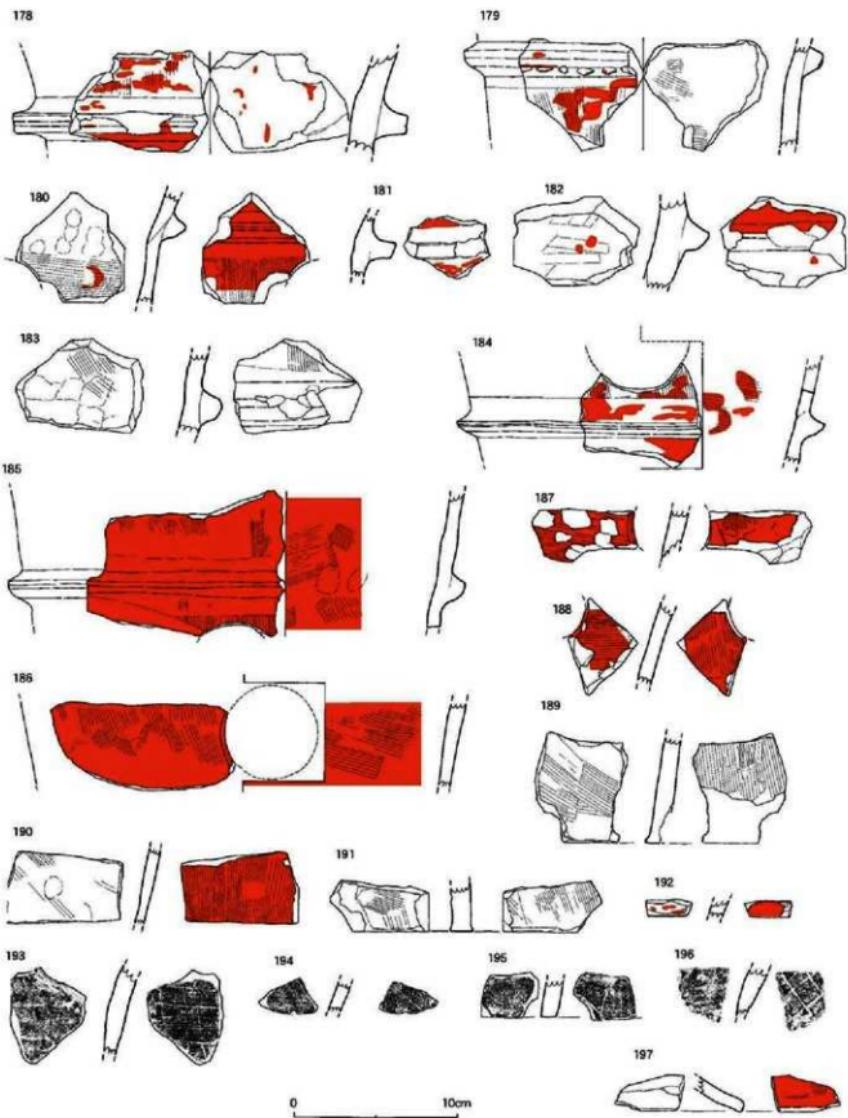
第25図 出土瓦実測図 (1/3)



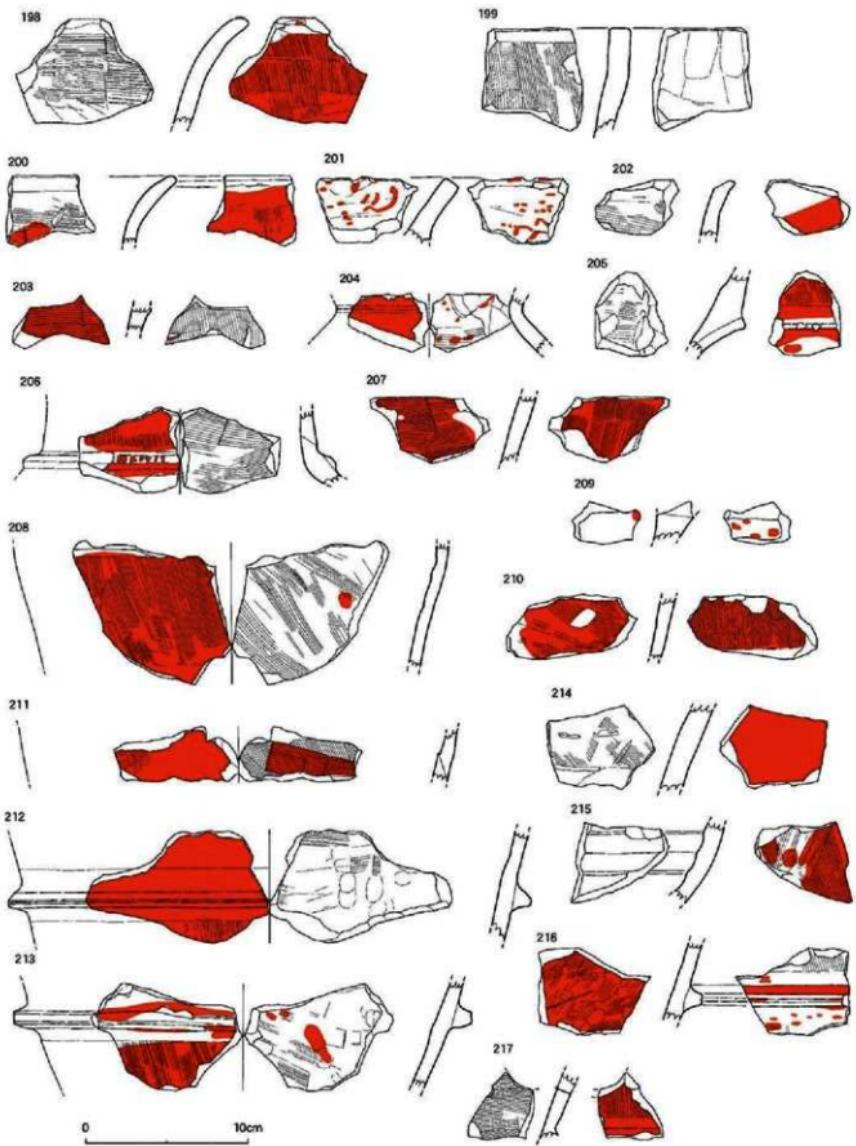
第26図 その他の出土遺物 (1/3・175と176は1/1)

く豚と同じような印象を受ける。165は魚型土製品である。166は土師質である。頬や四肢先端が欠損する。首はやや長く、尻尾は垂直に近いがやや後にむかって立つ。イヌか。167は2~3面掘下げ時に出土した。陶器質で大きく口を開け吠えているような印象を受ける。襟に毛の表現があり獅子か。前足と胴部下半は欠損する。170はII区4~5面掘下げ時に出土した白融合子、171・172は糸切りの土師皿で口縁に數點所の煤が付着しており、灯明皿として使用されている。171は014から172はI区の2~3面掘下げ時に出土した。173(130出土)・174(244出土)は陶磁器である。175はI区2~3面掘下げ時に出土したミニチュアの高壺脚部で底径2.8cm、残存高1.3cmを測る。細い棒先で円形の透かしを穿つ。赤橙色を呈し胎土は砂をほとんど含まず、全体的に雲母小片を含む。手捏ねで焼成は良好である。176はI区北側2~3面掘下げ時に出土した碧玉製の管玉である。径3mm、長さ8mmを測る。古墳時代である。177は人物埴輪の頭部である。房州塙の埋土中から出土した。巫女と思われる。顔面部以外は縦方向の粗いハケ目を施す。淡橙褐色を呈し、胎土は精良で砂をほとんど含まない。焼成は良好である。近代の埋立土中から出土したため、由来等は不明である。

(3)円筒埴輪 (第27・28図178~217) 旧御笠川の河川堆積中から多量に出土するとともに、各時期の造構からも多く出土した。178~183は籠遺存部である。籠は断面コの字型と三角型があり、三角型は上面が凹み、下面が張り出す。突起部は貼り付け時に横ナデを施す。184~188は透かし部分



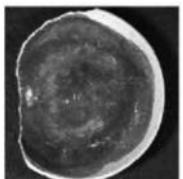
第27図 円筒埴輪実測図 1 (1/3)



第28図 円筒埴輪実測図2(1/3)



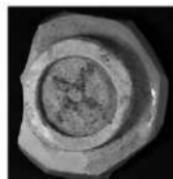
218



219 内底



219 外底



220

第29図 墨書き土器

遺物番号	出土遺構	墨書き内容	土器	部分	時期	遺物番号	出土遺構	墨書き内容	土器	部分	時期
218	154	「銅」+花押	白磁碗類	内底部	中世	219	外底	I 区 2面表	「松」	土師皿	外底部
219 内底	I 区 2面表	塗りつぶし	土師皿	内面	近世か	220	II 区 4~5 面掘下げ	「十」	白磁八角小碗	外底部	中世後半

表1 出土墨書き土器一覧



221



222



223



224



225



226



227



228



229

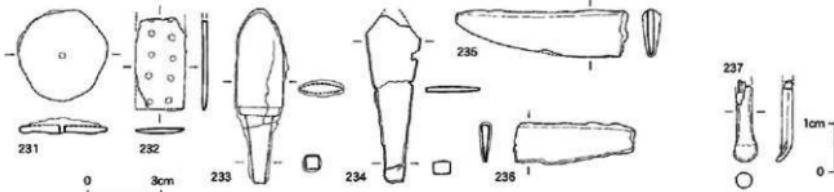


230

第30図 出土銭の透過X線画像

遺物番号	出土遺構	銭銘	初鑄年	時代	備考
221	075	□□□			鉄錢
222	135 上層	寛永通寶	1636年	江戸	古寛永
223	135 北側 2~3面掘下げ	寛永通寶	1668年	江戸	文銭
224	139	□□□			鉄錢
225	187	寛永通寶	1668年	江戸	3枚銚着、新寛永
226	187	寛永通寶	1636年	江戸	3枚銚着、古寛永
227	187	寛永通寶	1636年	江戸	3枚銚着、古寛永
228	I 区南 4面目から1段下げ	皇宋(通)寶	1039年	北宋	1/4欠損
229	II区粗砂上層	祥××寶			釘銚着、2/4欠損
230	III区南側粗砂下層	皇宋通寶	1039年	北宋	

表2 遺構別出土銭一覧表



である。いずれも円形を呈す。189～192は円筒埴輪下端と思われる。上部より器壁が薄くなるため、別の部分の可能性もある。193～196は線刻がある埴輪片である。格子状の線刻で屋根部分によく見られる模様のため家型埴輪の可能性がある。197は高环脚端部か。赤色顔料を塗布している。198～203は埴輪口縁部である。198の様に大きく外側に開くものと199のように直立に近い物がある。口縁が開く物には内面までハケを施すが、199は内面は指オサエで刷毛は施さない。204は朝顔型埴輪の肩部、205は二重口縁部である。206も朝顔型埴輪の肩部か。207～217は赤色顔料が良好に遺存する破片である。内面まで塗布する破片と、外面のみの破片がある。

(4) 墨書き土器（第29図、表1） 墨書き土器が3点出土した。218は「剣」+花押と思われる。219は内面を墨で塗りつぶす。外底部は「松」である。硯として使用しており、「松」は持ち主の名か。220は外底部に「十」の記号がある。

(5) 銅製品 銅鏡が10枚出土した（第30図221～230）。他の調査区と異なり、北宋鏡ではなく、日本近世の寛永通宝が主である。237は銅製の耳搔きである。柄は現状で長さ16mm、柄の径3mm、四部幅4.5mmを測る。

(6) 鉄製品（第32図231～237） 231は紡錘車である。径36mm、厚さ約3mmを測る。232は小札である。上端がかけるが、現状で長さ37mm、幅20mm、厚さ2mmを測る。径2mmの孔が2列に5つずつ並ぶ。233、234は鉄鎌である。233は完形に近く長さ7cm、幅1.9cmを測る。234は柄と先端を欠く。235、236は刀子である。鉄製品は他に釘等が出土した。

(7) 石製品 滑石製の石鍋片やその再加工品が出土している。

(8) 土製品 土鍤が多く出土した。土鍤は筒型と両端が細い型がある。古墳時代以降は蜻蛉片も多く出土しており、漁村的な性格が強いものと思われる。

(9) 木製品 旧河川から木小片が多く出土したが加工品はほとんど見られない。漆碗はSK217から横倒しの状態で出土した。造構検出時に一部削平した。木質はほとんど残っておらず、漆膜だけの遺存である。小型の椀で径は土圧で変形し不明。表面に赤橙色の文様がわずかに残る。

### 3. 小結

南側に房州堀、西側に那珂川があり、文字通り博多遺跡群の南西端に当たる。古墳時代は砂丘が西に延びていたがその後旧御笠川等に削られ東側に後退している。造構は古い時期では古墳時代前期の竪穴式住居が1軒出土した。蜻蛉がまとまって出土しており、古墳時代には漁村的な性格であったと考えられる。その後古代、中世と集落は続くが、房州堀は中世後半には墓域に、近世には水田となつており、水田を囲む溝と土留めの木杭列が出土している。旧河川の堆積には古墳時代から中世の遺物が混在した状態で多量に出土したが、その中に多くの円筒埴輪が含まれている。それらはほとんど河川によるローリングを受けていないため、あまり流されているとは思われない。現在埴輪を伴う古墳としては地下鉄祇園駅の東側に博多1号墳の存在が判明しているが、砂丘西側にも埴輪を持つ前方後円墳があった可能性が高いものと思われる。周溝は残っている可能性が高いため今後の調査に期待したい。

造構一覧表

造構品名	場所	作物	時代	形状	大きさ	説明	備考	
001	1区1差	陶器	近世	圓乳		輪形小網(数枚脚)、青白、白胎。陶器(体、便)、陶器足2点(1点に高脚)、泥物器皿(10点全て朱色焼成)、土器背可動(内側)、土器身(山口)、土器身(山口)、土器身(山口)、土器人形(朱色焼成)。		
002	1区1差	試験トレンチ	銅代		233	61	白陶器(内側)、青白、白胎。陶器(便)、泥物器皿(10点)、陶器足2点(1点に高脚)、其の他、土器身(山口)、土器身(山口)、土器身(山口)、土器身(山口)。	
003	1区1差	陶器					砂付、白胎。最高部高差1mm、底面凹、陶器足2点(1点に高脚)、泥物器皿、泥物器皿、瓦(淡青瓦、灰瓦)、瓦片(木様)、土器腹、表身、L型口縁複(幼生時代的)、古墳時代土器器(脚、便)。	
004	1区1差	陶器		梅円形	395	26		
005	1区1差	陶器		圓丸形	206	31		
006	1区1差	陶器					砂付、最高部高差1mm、底面凹、陶器足(1点)、土器底、土器腹(内側り、ハラマウリ)、瓦(淡青瓦、灰瓦)、古墳時代土器(肩平付部、底付、腹)、器、盖)。	
007	1区1差	土坑?	近世	圓丸形	118	29	砂付、白陶器底及白胎、白胎。陶器(三脚)、陶器足(便・脚)、七輪、油壺器皿(5点別個体)、其の他、土器身(山口)、土器身(山口)、土器身(山口)、土器身(山口)、土器身(山口)。	
008	1区1差	土坑?	近世～銅代		52	18	最高部高差2mm、底面凹、陶器足2点(1点に高脚)、泥物器皿、泥物器皿、瓦(淡青瓦、灰瓦)、土器腹耳、土器腹、土器身(内側り)、土器腹(内側り)、瓦(淡青瓦)、其の他(2点)、瓦(淡青瓦)、瓦片、器、L型口縁複(幼生)、瓦底、門字縁複(器)。	
009	古墳倒		古代末				瓦(淡青瓦)、瓦(瓦)、瓦(瓦)、瓦(瓦)、瓦(瓦)、瓦(瓦)、瓦(瓦)、瓦(瓦)、瓦(瓦)。	
010	1区1差	穴式試験	不明	梅円形	56	23	土器底、土器底・腹(内側り)、土器腹。	
011	1区1差	穴式試験	不明	円形	17	35	土器底(内側)、土器底(内側)。	
012	1区1差	穴式試験	中世	円形	26	31	白陶器、土器底、土器底(内側り)。	
013	1区1差	穴式試験	中世	梅円形	57	33	陶器底、瓦(瓦)、土器底(内側り)。	
014	1区1差	穴式試験	不明	円形	42	13	泥物器皿(細小)、土器底(内側り)、土器腹。	
015	1区1差	穴式試験	不明	円形	26	17	泥物器皿(細小)、土器底(内側り)、土器腹。	
016	1区1差	12～13世紀	圓丸形	165	51	砂付、陶器底(青釉)、白陶器(内側)、白胎底、陶器足1点、油壺器皿(5点別個体)～7点、瓦(淡青瓦)、瓦(瓦)、土器底(内側り)、ハラマウリ(内側)、石玉、石器。		
017	1区1差	土坑?	12～13世紀	小圓形	72	23	白陶器、其の他、油壺器皿、泥物器皿(内側)、土器底(内側)、土器底(内側)、瓦(瓦)。	
018	1区1差	不詳	130年	圓丸形	116	14	須多里御殿(須多里)、白陶器、白胎、白胎(内側)。(要参考)、瓦(瓦)、油壺器皿(1点)、瓦(瓦)、瓦(瓦)。	
019	1区1差	14世紀前後	不明	円形	132	20	其の他(2点)、瓦(瓦)、瓦(瓦)、瓦(瓦)、瓦(瓦)。	
020	1区1差	土坑?	中世	圓丸形	72	19	(其の他)、瓦(瓦)、瓦(瓦)、瓦(瓦)、瓦(瓦)。	
021	1区1差	土坑?	中世	圓丸形	86	11	瓦(瓦)、白陶器、瓦(瓦)、土器底(内側り)、土器底(内側)、瓦(瓦)、瓦(瓦)、瓦(瓦)。	
022	1区1差	瓦	西晋時代	円形	49	5	土器底(内側)、瓦(瓦)。	
023	1区1差	瓦	西晋時代	圓丸形	49	28	土器底(内側)、瓦(瓦)。(内側)、瓦(瓦)。	
024	1区1差	瓦	西晋時代	中型?	59	7	土器底(内側)、瓦(瓦)。(内側)、瓦(瓦)。	
025	1区1差	瓦	不詳	圓丸形	42	36	瓦(瓦)。(内側)、瓦(瓦)。	
026	1区1差	15世紀～16世紀	小圓形	40	2	白陶器底(内側)、白胎、土器底(内側)、瓦(瓦)。		
027	1区1差	15世紀	梅円形	36	5	土器底(内側)。(内側)。		
028	1区1差	穴式試験	不明	圓丸形	44	22	土器底(内側)。	
029	1区1差	穴式試験		圓丸形	34	40		
030	1区1差	穴式試験	不明	圓丸形	34	8	陶器底小量、不柄土器(内側)。(内側)。	
031	1区1差	15世紀	梅円形	39	7	土器底(内側)。(内側)。(内側)。		
032	1区1差	15世紀	梅円形	39	15	瓦(瓦)。(内側)。(内側)。		
033	1区1差	15世紀	不詳	圓丸形	45	35	土器底(内側)。(内側)。	
034	1区1差	15世紀	西晋時代	圓丸形	47	30	土器底(内側)。(内側)。(内側)。	
035	1区1差	土坑?	中世	圓丸形	104	28	青白、白陶器底(内側)、陶器底、陶器腹、瓦(瓦)。(内側)、土器底(内側)。(内側)、白陶器底(内側)、青白土器底(内側)。(内側)、土器底(内側)。(内側)。(内側)。	生半～古墳時代の器
036	1区1差	青白陶器	中世後半～近世		39	34	青白陶器(2件組)、白陶器(1点)。(内側)。	
037	1区1差	16世紀前後	不明	圓形	40	26	土器底(内側)。(内側)。	
038	1区1差	16世紀前後		圓形	43	14	土器底(内側)。(内側)。	
039	1区1差	17世紀前後	圓丸形	57	20	龜兹兜形輪底輪圈、土器底(内側)。(内側)。(内側)。		
040	1区1差	17世紀前後	西晋時代初期	円形	31	3	白陶器底(内側)、白胎、土器底(内側)。(内側)。(内側)。(内側)。	
041	1区1差	土坑?	近世	圓形	142	122	白陶器底(内側)、白胎、青白、白胎、瓦(瓦)。(内側)。(内側)。(内側)。(内側)。(内側)。(内側)。(内側)。(内側)。(内側)。(内側)。(内側)。(内側)。	生半～古墳時代の器
042	1区1差	穴式試験	中世	圓丸形	87	44	白陶器底(内側)、白胎、瓦(瓦)。(内側)。(内側)。(内側)。	
043	1区1差	16世紀前後	不明	梅円形	43	4	白陶器底(内側)。	
044	1区1差	16世紀前後	古墳時代初期	梅円形	165	151	土器底(内側)。(内側)。(内側)。(内側)。(内側)。(内側)。	
045	1区1差	土坑?	不明	圓形	85	19	青白底(内側)。(内側)。(内側)。(内側)。(内側)。	
046	1区1差	穴式試験	不明	圓形	31	8	白陶器底(内側)。(内側)。(内側)。(内側)。(内側)。(内側)。(内側)。(内側)。	
047	1区1差	16世紀前後	中世後半～近世	圓形	45	10	瓦(瓦)。(内側)。(内側)。(内側)。(内側)。(内側)。(内側)。(内側)。(内側)。(内側)。(内側)。	
048	1区1差	16世紀前後	西晋～近世	圓形	23	16	泥物器皿(内側)。(内側)。(内側)。	
049	1区1差	16世紀前後	古墳時代	梅円形	45	66	土器底(内側)。(内側)。	
050	1区1差	16世紀前後	古墳時代?		36	36	陶器底(内側)。(内側)。(内側)。(内側)。(内側)。(内側)。	
051	1区1差	不詳	古墳時代初期	台形	56	3	土器底(内側)。(内側)。(内側)。	
052	1区1差	陶器	時代	圓形	43	42	泥物器皿1点(内側)、耳杯1点(内側)、土器底2点(内側)。	器體不全(内側)。
053	1区1差	16世紀前後	不明	圓形	84	13	泥物器皿1点(内側)、耳杯1点(内側)、土器底2点(内側)。	
054	1区1差	土坑?	近世	圓形	84	13	陶器底(内側)。(内側)。(内側)。(内側)。(内側)。(内側)。(内側)。	
055	1区1差	16世紀前後	古墳時代	円形	27	21	輪形(内側)。(内側)。(内側)。(内側)。(内側)。	
056	1区1差	16世紀前後	古墳時代	圓形	43	12	土器底(内側)。(内側)。(内側)。	
057	1区1差	16世紀前後	近世～近世	不圓形	86	77	青白、土器底(内側)、土器底2点、淡青小網(内側)、陶器(内側)、白陶器(内側)。泥物器皿(内側)。(内側)。(内側)。(内側)。(内側)。(内側)。(内側)。	
058	1区1差	16世紀前後	不明	小圓形	49	11	陶器、青白、土器底(内側)、土器底2点。	
059	1区1差	16世紀前後	中世後半～近世	圓丸形	55	44	紫陶(小)、小圓(内側)、白陶(内側)、土器底(内側)。	金傳の編目多い













1. I 区 1 面(南東から)



2. I 区 3 面(南から)



1. I区5面(南東から)



2. II区3面(南から)



1. II区5面(南から)



2. 第5面調査区全景(南から)



1. I 区 1 面(南西から)



2. I 区 2 面(南から)



3. I 区 3 面(南東から)



4. I 区 4 面(南から)



5. II 区 3 面(南から)



6. II 区 3 面北端(西から)

図版 5



1. SE 041 井筒検出状況(南西から)



2. SE 041 完掘(南西から)



3. SE 158 土層(西から)



4. SE 260(北から)



5. SE 272(北から)



6. SE 275(西から)



1. SE 168(西から)



2. SE 168(南から)



3. SE 168 井筒(西から)



4. SE 168 井筒土層



5. SE 280(北から)



6. SE 280 井筒(南から)

図版 7



1. SK 153 遺物出土状況(南西から)



2. SK 212 土層(西から)



3. SK 259(北から)



4. SK 144(西から)



5. SK 187 完掘(北から)



6. SK 146(北西から)



1. SX 274 (南西から)



2. SK 276 (南東から)



3. SX 204 (北から)



4. SX 204 土層 (南から)



5. SD 154 (南東から)



6. SD 154 (南から)

図版 9



1. SD 154 北端か(西から)



2. 房州堀土層(西から)



3. 房州堀土層(南西から)



4. 房州堀北側立ち上がり(西から)



5. 人物埴輪正面



6. 人物埴輪側面



1. SX 271(北から)



2. SX 271周溝杭出土状況(東から)



3. 水田下層動物足痕



4. SC 151(西から)



5. SC 151(南から)



6. SC 151蛸蟲出土状況(西から)

図版 11



1. I 区河川トレンチ土層



2. II 区東壁土層(西から)



3. II 区河川部確認トレンチ土層



4. SK 217 漆椀出土状況



5. SK 217 出土漆椀



6. SE 168 井筒

## 報告書抄録

書名 博多129  
副書名 第171次調査報告  
卷次 129  
シリーズ名 福岡市埋蔵文化財報告書  
シリーズ番号 1041集  
編集著者 屋山洋 編集機関 福岡市教育委員会 発行機関 福岡市教育委員会  
作成法人ID 40134 発行年月日 2009年3月31日  
郵便番号 810-8621 住所 福岡市中央区天神1丁目8番1号  
電話番号 092-711-4667  
所収遺跡名 博多遺跡群第171次  
ふくおかんふくおかしづかたくぎおんまち  
所在地 福岡県福岡市博多区祇園町566、585-1  
コード 市町村 40131 遺跡番号 020121  
北緯 33°35'26" 東経 130°24'41"  
調査期間 20070219～20070615 調査面積 511m<sup>2</sup>  
調査原因 立体駐車場の建設 種別 集落、水田 主な時代 古墳時代、中近世  
主な時代と遺構・遺物  
古墳時代前期～堅穴式住居(飯蛸壺、土師器)  
古代末～中世～井戸、溝、土坑、土壤墓、柱穴群、自然流路  
近世～集落

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1041集

## 博多129

—第171次調査報告—

2009年(平成21年)3月31日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8-1  
印刷 末松印刷株式会社  
福岡市博多区東部岡2-4-36

